

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育の「根本考察」にチャレンジ!

「暮らし」の視点で保育を見直す - 食を考える

[実践] 私の保育ノート

寄り添うことと表現

[実践] 保育をつなぐ

職員室 - 子どもたちの拠り所

2020

秋

since 1901

第119巻 第4号

お茶の水女子大学

『幼児の教育』編集委員会

それぞれの園のための 就業規則

コンプライアンス・内部統制・マネジメント

著 / 安岡知子
(人財コンサルタント・特定社会保険労務士)
監修 / 桑戸真二 (株式会社福祉総研)

園で問題となる 労務の話題をほぼ網羅！

「時間外労働」「有給休暇」「休職と復職」など、身近な課題への解決の道筋をわかりやすく解説。園の“働き方改革”を検討する際にも役に立つ1冊。

それぞれの園のための 就業規則

コンプライアンス・内部統制・マネジメント

安岡知子 (人財コンサルタント・特定社会保険労務士)
監修 / 桑戸真二 (株式会社福祉総研)



「時間外労働」「有給休暇」「休職と復職」など、身近な課題への解決の道筋をわかりやすく解説。

保育ナビブック

園で問題となる
労務の課題を
ほぼ網羅

定価本体1,800円+税 全80ページ
26×18cm 109-86 ISBN978-4-577-81473-4

法令の条文解説ではなく、 事例を通して、無理なく理解できます

Point

各項目、園からの具体的な「困りごと」事例に対して、著者が解決策を「ご提案」します。

2 年次有給休暇、 働き方改革でどう変わる？



年次有給休暇の消化が難しくなっています
コンプライアンスの観点から解説します。
年次有給休暇の消化は、労働法上の規定に基づいて行われるべきです。消化率の低下は、労働者の健康やモチベーションに悪影響を及ぼす可能性があります。働き方改革の一環として、消化率の向上を図ることが重要です。具体的な対策として、消化率向上の支援策を提案します。

就業規則の改正が必要かどうか
就業規則を改正する必要がある場合は、関係者への説明と同意を得る必要があります。

項目	改正前	改正後	改正前	改正後
就業規則	1. 労働時間: 月間平均労働時間22.5時間、月間最大労働時間27.5時間	1. 労働時間: 月間平均労働時間20.5時間、月間最大労働時間25.5時間	2. 有給休暇: 1年あたり10日	2. 有給休暇: 1年あたり12日
労働協約	1. 労働時間: 月間平均労働時間20.5時間、月間最大労働時間25.5時間	1. 労働時間: 月間平均労働時間18.5時間、月間最大労働時間23.5時間	2. 有給休暇: 1年あたり12日	2. 有給休暇: 1年あたり15日

目次

- 第1章 労働時間を考える
- 第2章 休暇を考える
- 第3章 人材育成を考える
- 第4章 非正規職員について考える
- 第5章 休職と定年を考える

Point

著者は園での管理職経験があります。顧客から相談の多い、園ならではの課題を集めました。

Point

図表やマンガを用いながら、課題になっている状況をイメージしやすくしました。



見つけた見つけた。

黄色くておーっきいはっぱ。

ぼくが見つけた。

ぼくを見つけれられるかな？

子どもの情景

写真

子どもの情景

1

目次 まと

今、ここで、新たに考えること

2

特集

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 13

「暮らし」の視点で保育を見直す

―食を考える―

4

《座談会 2020》

暮らしの中での「食」の体験

5

《アーカイブズ》

「児童の辨當」

―「婦人と子ども」第11巻第5号

(1911年)から―

18

実践

私の保育ノート

寄り添うことと表現

砂守頼子

20

実践ファイル

3 園合同研究会の取り組みから その1

日々の生活の中でのつながり

佐々木麻美・杉浦真紀子

24

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.7

職員室―子どもたちの拠り所

嶋田博美

28

連載

子ども学の窓から

これからのチャイルド・スタディーズを展望して
社会の視点から考える幼児教育の試み

小玉亮子

34

目次

視点

日本語で外国人と付き合う

長田恵子

38

ニューヨークでの保育園・幼稚園選びの経験

宝月理恵

42

文化

鎌倉おもちゃ屋物語 その7

黒須和清

47

探究

育児雑誌『ひよこクラブ』における
子どもを預けることに関する言説の変化

栗原結海

61

子どもたちの声

ナーサリーこぼれ話

イベント・メディア情報

読者投稿・編集後記 他

62

まだ 今、ここで、新たに考えること

秋号が皆様のお手元に届く頃、「新しい生活」
がどんな日常になっていることが。新型「コロナウ
イルス感染症対策に伴い、次々と新しい言葉が共
通語になった。「緊急事態宣言」「3密」「濃厚接触」
「身体的距離」……。「在宅勤務」という新たな働
き方も急速に広がり、遠隔会議など無縁のことと
思っていたのに、驚きの変化と向きあった人もた
くさんいたことだろう。そして大学生から小学生
まで、パソコンと向きあい学ぶ姿が日常となった。
休園期間中に、幼児とICT(情報通信技術)
の関係も大きく変わった。園に行かない日々、
ネット上で動画を見ることで自分が行くはずの園
の様子を知り、先生と出会い、その次に、実際に
出会うという経験をした子どもたちもいたことだ
ろう。「先生、〇〇してたね」「かめはどこにいる
の？」等、バーチャルな情報と現実生活を結び付
け、理解し、伝えてくる子どもたちに、たくまし
さを感じる。

以前と同じにはできない不満や不安はあるけ
れど、今の暮らしだからこそ、新たに感じ、気づ
くことがある。少し不自由な暮らしは、今、ここ
で考え、工夫し、生み出すチャンスも与えてくれ
る。(上坂元)

特集

保育の「根本考察」

にチャレンジ！13

今から約1世紀前、倉橋惣三が本誌にこう書いた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。(中略)——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。」「斯くてまた暮れゆく」大正5年12月)……倉橋がもし今生きていたら、現代の幼児教育界をどう見るだろう。倉橋先生、私たち根本考察できていますか？

「暮らし」の視点で 保育を見直す — 食を考える

今年度は「暮らし」を彩るいろいろなテーマで語りあうことで保育を見直していきます。秋号のテーマは「食を考える」です。暮らしの中の「食」に着目し、子どもが育つことと「食」の体験、食をめぐる子どもと大人の関係について考えてみたいと思います。

CONTENTS

座談会 2020

暮らしの中での「食」の体験

アーカイブズ

「児童の辨當」

— 『婦人と子ども』第11巻第5号(1911年)から —

暮らしの中での 「食」の体験

学生が乳幼児の「食」とかわる

上坂元 今日この座談会のテーマは、子どもたちの「暮らし」の中での「食」についてです。はじめに皆さんそれぞれの「食」の専門の視点を踏まえて自己紹介をしていただき、最近気になっている「食」に関することや、子どもと「食」についてなど、語りあっていけたらと思っています。よろしくお願いいたします。

赤松利恵
會退友美
濱崎由紀子
上坂元絵里
(進行)

赤松 お茶の水女子大学で教員をしている赤松です。学部では生活科学部の食物栄養学科に所属しており、栄養教育論などを担当しています。食物栄養学科は、管理栄養士養成施設でもあり、私自身も管理栄養士の資格をもっています。

會退 私は、東京家政学院大学で管理栄養士の養成課程の教員をしております。赤松先生の研究室で学んで博士を取得後、都内の保育園で栄養士をした後、現在の大学に着任しました。

濱崎 お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）で昨年度、調理を担当しました。その前年までは保育を担当していたので、保育士から調理担当になったわけですね。ナーサリーのお昼は、おかずは家庭から持ってきてもらって、ご飯とみそ汁を作ります。それから毎日のおやつを調理室で作っています。おやつは、赤松先生が指導してくださって

赤松利恵（お茶の水女子大学教授）

濱崎由紀子（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー保育士）

會退友美（東京家政学院大学助教）

上坂元絵里（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）

いるOchhasの学生と共に考えたメニューやレシピが基になっています。

ナーサリーの建物の造りは、真ん中に調理室があつて、0歳児の部屋からは調理室の中が見えて、反対側の1、2歳児の部屋は調理室の小窓から見る事ができ、その窓から子どもがのぞいていたりするんです。

上坂元 幼稚園の生活の中でも「食べる」ということは子どもたちにとっていろいろな意味がありますので、こうして先生たちとお話しできるのはうれしいです。早速ですが、話のきっかけとして触れたいのはお茶の水女子大学の「Ochhas」の取り組みですね。

會退 週に1回くらいのペースで、食物栄養学科の学生がナーサリーにおやつを作りに行くんですよ。そこで保育に触れることができるのが、いいなと思つていて。やっぱり、今の学生たちは子どもにとっての環境構成や「食」に対するイメージがもちにくいや感じ

ています。つい、子どもたちに「教えなきゃ」と思いがちな学生にとつて、ナーサリーの保育士さんたちの温かい声掛けとか寄り添い方が見られるのが、養成の勉強だけでは得られない、良い経験だと思つています。

濱崎 2年くらい前から、おやつを作りに来てくれた学生さんに、その日に子どもたちと一緒に食べることも経験してもらつているんです。学生にとつて、一緒に食べることは作る以上に驚きや楽しみがあるようで、「こんな小さなテーブルで食べるんだ」とか「こんな小さい手でつかむんだ」と感じてくれて、それで次に学生さんが来たときに、作り方の細やかさが違つていたりして、それは実際に経



▲會退友美氏



▲子どもたちが混ぜて、一緒に作って食べるパンケーキ。ナーサリーにじぐみ(1、2歳児クラス)にて。

験しないといけないことだと思っただけです。子どもたちと同じテーブルで食べるから、子どもたちからの「おいしい」とか「かたい」とかの反応も実感として伝わるみたいです。

子どもと接する機会が少ない時代だからこそ、彼女たちのように「食」が好き、作ることも好きな人たちが、実際に小さい人と一緒に食べてみて、子どもと共に同じ体験をすることで、その次から作り方を一層考えてくれたり、一緒に食べることがうれいって思っ

てもらえたり
することが
こちらとし
てもうれし
いなと思
います。

會退 保育

士の温かい
声掛けだっ

たり、自分でも「どうかかな？」って問いかけてみたり、子どもの反応を待ったりするのは実習やロールプレイでもなかなか経験できないことで、保育園などの専門的な職に就かなくても、生かせるときがあると思います。

一緒に食べる、同じものを食べる

赤松 幼稚園はお弁当ですよ。保護者の方に何か伝えたりするのですか？

上坂元 お弁当は、どうしても時間がかかって食べられない子が何人かいるんですよ。ですから、食べやすい量で、そして幼稚園では「嫌いなものを食べられるでしょ」じゃなくて「好きなものを気持ちよく食べられる」ように入れてあげてくださいと、入園、進級当初は保護者をお願いします。

會退 保育園とは考え方が違いますね。保育

園だと、友達と同じものを食べることや苦手なものも含んだいろんな食体験もあるので……。



▲ナーサリーほしくみ（8か月児）の昼食（離乳食）。

赤松 家では食

べないものがある

ったりとかね。

それが食体験に

もつながります。

濱崎 ナーサリ

ーでは、その食

材を食べることが初めてにならないように、

あらかじめお家で食べてもらおうよう保護者に

は協力してもらっています。そうは言っても

切り方とか使われ方が初めてだと、例えば今ま

では大根を食べられたのに、四角く切ったのは

ちよつと無理、という子どももいますね。子ど

もにとって「生まれて初めての体験」に一緒に

かかわることも多く、そこは面白さでもあり、

すごく重要なポイントだなとも感じています。

會退 そこでの保育士さんの一瞬のかかわり

って、子どもにとってその体験が快不快か

が決まるので、重要ですよ。ナーサリーで

気をつけていること

ってありますか？

濱崎 昨年度の0歳

児のお子さんと、9

か月過ぎからナーサ

リーの出汁だけ飲ん

でいたのですが、少

しずつ物足りなくな

った時期が来て。家

では野菜も食べてい

ると聞いたので、柔

らかく煮た野菜の具も入れてみたら、それは

食べない。でも、つぶしたら、なんてことなく

食べたんです。それは食感なのか何かわから

ないんだけど、「どうしたら食べるのかな」

とか「こんな感じはどう？」と保育士と連携

してコミュニケーションをとるのが大事だな

と思えましたね。大人たちが工夫しているの

を見て、食べる本人も「じゃあ期待に応えよ



うか」みたいな気持ちも出て……。

調理室からも子どもたちの様子が見えるのが良くて……。 「あ。食べた食べた」 って、作った人も保育者も同じ気持ちになれることはすごく大事だなって思いますね。

會退 調理室と保育室の連携がうまくできていないという話をよく聞きます。調理室から子どもが見える環境があつて、さらに濱崎さんは元々保育をしていて、ということなので、それはとても強みだなって感じますね。

濱崎 子どもたちから調理室が見えるついでうのはよく聞くけれど、調理室から保育の場



▲濱崎由紀子氏

所が見えるついで

うのは少ないかもしれないですね。

調理室に入つてしまつと、どうしても衛生面が優先されて、もちろん

それは大前提で大切なんだけれど、子どもたちと一緒に食べるとなるとそれはわかりではないし……。調理の場での役割はもちろん大切だけれど、生活するというのはそれだけじゃない。そういうバランスが難しいですね。

食べたいという気持ちを共に育てる

上坂元 「食べる」ことつて、子育ての中で負担やプレッシャーになることもあれば、そうでないこともあるけど、そういった経験つてありますか。

會退 やっぱり個性なんですかねえ。お母さんがおおらかだと、子どももおおらかだし、お母さんが、子どもが「食べない」ことに意識し過ぎてしまつていたら、子どももそうなつちやうし……。子どもも意固地になつてくる気がする。

濱崎 親御さんの「のんきさ」つて大事かもしれないですね。衛生面も大切だけれど、それ

よりも「楽しく生きていこうよ」って視点を
もつこと、どれだけ腹を据えられるかってい
う部分ですかね。

會退 子どもが成長して変わる部分もありま
すね。わが家の長女は、以前離乳食は何でも
食べたのに、大きくなって自我が芽生えて、
好き嫌いが激しくなってきたんです。ただ、
妹が離乳食で食べているのに触発されて食べ
たりするのを見ると、親との関係だけじ
やない、他の人とのかわりから生まれる自
信のつけ方があるんじゃないかと思えます。
長女は大根が嫌いなんですけど、切り方次第で
「食べない」って……。 「なんてやつだ！」
と思ったりもするけれど、興味をもってくれ
ているのかな、とプラスに捉えていて、そこ
からまた自分で切ってみたいとか言ってくれ
ているので、まあいいかなと思っています。
だから子どものその行動の意味や捉えについ
て、親だけじゃない、保育士さんも含めて周

りのサポートや存在があるってありがたいと
親としては思いますね。

濱崎 保護者と保育者で「共に成長を見届け
ている」という感覚をもつて連携できるとい
いですよね。ナーサリーでも日々の保育の様
子や食に関する出来事を掲示して保護者に様
子を伝えたりしますが、家では見られない表
情があると、子どもたちの違った一面が見え
たりします。

赤松 以前、ナーサリーでスイカ割りをした
ときの写真を見せていただいたのですが、子
どもたちのうれしそ
うな顔が印象的でし
た。スイカを丸ごと
買ってスイカ割りな
んで、今では家だと
なかなかできないで
すからね。いい経験
だなと思いました。



▲赤松利恵氏

會退 調理室の人として濱崎さんは保護者との連携やコミュニケーションをとったりしますか？

濱崎 以前担任をもっていた頃にかかわっていたお母さんもちよつと調理室をのぞいてくれたりしますね。『ちゅーぼー（厨房）だよ』とか出しています。

會退 『厨房だより』？ すごく気になります。
濱崎 ちよつど新米が届いたときに出したんです。お釜をのぞき込む子どもたちの表情とか、写真に撮って載せました。白いご飯が苦手な子もいますけど、ナーサリィだとみんなと



▲上坂元絵里氏

一緒に「ほかほかだね」と言つて食べて、お母さんがびっくりしたりとか。
上坂元 食べることに気持ちつ

て、関係あるのかしら？ 誰かと一緒ということで食べられるとか、気持ちが開いていると食べられるとか。

會退 安心感っていうのも、あるかもしれないね。特に授乳や離乳食は安心感が大切だと思つています。保育士さんとの心の一致っていうのかな？ 心が一致していくまでの過程で、どんなに小さくても、子どもたちはママでなければわかるし、信頼関係がないと飲まないし食べない。うちの子どもたちも、慣らし保育でハンガーストライキをしました。食事や睡眠という、安心感がないと営めない行為は、普段の生活での信頼関係があつた上で成立する。でも子どもたちは、普段と違う状況で嫌だなど思つても、大人がつくつた環境に頑張つて合わせようとしてくれる。ただ、その過程が無理やりなのか、家庭に近い状況から少しずつ保育士に心を開きながら園に慣れていくのかで大きく違ふと思います。小さ

な子どもたちにもすっかり意思があり、いろいろなことをわかっている。だからこそ、こんな小さなときから自分の思いを諦める経験ではなく、受けとめてもらえる経験を積み重ねてほしいと思います。

大規模な保育園だと子どもが保育者や環境に合わせている感じがします。でも子ども一人ひとりに合わせる園も増えてきているようです。保育士が子どもに歩み寄っていく、保護者に子どものことを聞いたりしてかわっていく中での、保育士と子どもとの通じ合いもあるのだと思う。

楽しい食はどこから?..

赤松 最近気になっているのは、「食の楽しさ」って何だろうということ。「食の楽しさ」が、きちんと定義されてないですね。友達と話すのが楽しくて、そういう場面があるから食べるのが楽しいと感じるのかなと……。

でも、最近私が思うのは、食べ物に対してちゃんと向きあっていることも、「食の楽しさ」なのではないかということ。おしゃべりに夢中でテーブルの食事を見てないというのは、「食の楽しさ」とはちよつと違うのかと思いますね。小学生を対象とした調査で、食に対する感謝の気持ちをもっている子どものほうが、よくかんで味わって食べていました。食べ物に向きあっている時間が重要なのかなと思います。

上坂元 附属幼稚園の園庭にはシイの実が落ちるんですが、それを炒って食べるのが恒例になっていて、自分たちで拾って洗って食べるんですね。なかなか実を食べるのが難しいので、一生懸命にむいているんですけど、目線は次のおいしいものを見てるんです(笑)。「食」への飽くなき追求と言いますか、今の子どもたちって恵まれてるけれど、ああいう経験って大きいんだろうと感じます。



▲ナーサリーほしぐみ（0歳児クラス）の昼食風景。

赤松 食物がどこから来たのか、そのプロセスを知ることが重要ですね。ある小学校で、子どもたちがご飯をよく残すので、農家さんの話を聞き、最後に自分たちでおにぎりを作って販売するところまでの総合学習をさせました。先生たちは、そういう苦労を知ったらご飯を残さないだろうと期待したんですね。しかし、実際、給食のご飯の残菜率は変わらなかった。子どもたちに聞くと、「あの米とこの米は違う」と言う。自分たちで作ったり

採ったりしたお米と、毎日食べているお米は違うと子どもは認識するんですね。日々食べているもののプロセスを考えるんですかね。

會退 もしかするとお母さんが作っているという安心感もあるかも。台所で作っているお母さんの姿や、それこそ調理室も。

濱崎 0歳児担当の保育士が「はまさんのご飯食べよう」「はまさんのおみそ汁飲もう」と子どもたちに言ってくれていて、食べているときも、「はまさんにおかわりもらいに行こう」と言う。私と直接生活していない子どもたちとも、保育士が私につなげてくれて、子どもたちも私と保育士との信頼関係を見ている。保育士が仲良くしている人が作っていることをわかっているから食べられるってことはあると思う。だから、子どもにとっては、自分が知っている人、好きな人が作っているところも見て、それを食べるということとは、大事な経験なんだと思います。

赤松 ゆっくり味わって食べることに、食べ物に対して向きあう食べ方。お友達とのおしゃべりも大事だと思うけれど、食べ物とおしゃ

べりするっていうんでしょうか。食べているものができるまでのプロセスを家庭でも見せると安心感につながるでしょうね。お弁当も、見ないでポンと渡されるのか、作っている様子を見て、「こんなの作った」って話しながら持ってくるのかで変わってくると思います。

濱崎 子どもの周りに、作るプロセス、例えばワクワク感や匂いとか音があったりしますね。匂いとか音と違って、結構大切かもしれない。

會退 そうですね。子どもって匂いとか音とか大好きですもんね。

上坂元 確かに、幼稚園で食べているシイの実も、炒ったときの匂いで子どもたちが集まってきました。へらで炒るときに出るガチャガチャって音もよく聴いていますね。

赤松 そう思うと、いろんな匂いや味を体験してほしい。栄養学的にも一つのものだけで完成する食はないので、いろんなものを食べ

てほしいなっと思っています。何でも食べられるようにしておいたほうがいいと思いますね。

豊かな食体験とは

濱崎 大きくなると親とは一緒に食べなくなる時期も来るけれど、小さい頃に食べ物を作る人を見たり、一緒に作ったり食べたこと、ことや、どうやって食べたかという記憶が残る。その食体験はのちのち生かされてくると思いますね。メニューにはなくても心の中に「お母さんの作った大根」っていう料理がある、みたいな。

赤松 最近は、外食や中食（調理、加工済みのものを買ってきて家で食べることを利用するご家庭が増えているから、食べ物を作る過程を見たり、体験したりする機会も減っていますね。

上坂元 幼稚園でも、畑を使って育てているのですが、畑で育てやすい野菜は子どもたち

が苦手な野菜が多い。トマト、キュウリ、ナス、ピーマン。でも、幼稚園で育てた野菜は1個を大人数で分けるので、一人分がとでも小さくなる。それで訳もわからず食べちゃったり、友達が食べているのをじーっと見て、見ながらいつの間にか食べちゃったりする。お家でその野菜がどん！と出ると食べられなかつたりするんですが。

會退 娘は、苦手なものを給食で減らして食べたいことを言ってきました。本人が決められるものを毎食出すというのはなかなかできないけれど、保育園だとそれができて、さらに自分で減らして食べる量を決められるから自信にもなっているようです。また、長女を見てみると、自分の苦手な食べ物も、お友達が苦手な食べ物も、お互いに認めあっているようです。「私は今日、苦手なキャベツを頑張った。○○ちゃんは、タケノコ苦手なんだよ。

堅いのが嫌なんだって」と、人それぞれ味覚が異なり、苦手なものも違うことを認識している。

上坂元 食をめぐる体験が多いのもいいですよね。この辺り、子どもに食べさせることで苦労している保護者にとっては、関心が深いところだと思います。

濱崎 そうそう。まず、そもそもいろんな食に出会わないと、自分が嫌いか好きかもわからない。

會退 うちの子どもたちは自由に育て過ぎたのか、冷蔵庫を自分でのぞいて、食べたいものを選びます。次女も1歳なりに、ここには面白いものがいっぱい入っているとわかっていうようです。例えば私が料理をしていると横にいて、冷蔵庫が開くと一緒にのぞいて、野菜室からニラを取り出して袋ごとガジガジかんでいたり。冷蔵庫の扉を閉めようとする時、「ん〜！（閉めないで〜）」と。

保育園から帰ってくるとおなかをぺこぺこで、とりあえず洗ったミニトマトとかを出しますが、次女は台所でお皿を受け取ると一人で持つて行って、テーブルでお姉ちゃんと食べてくれます。料理が一度に出せなくて、とりあえず出来たものから私が運ぶと、今度は「ママも一緒に」と迎えに来る。私の足を引つ張ったり押ししたりして移動させようとするんです。一緒に食べたいという気持ちがいささかあるんだなあと思います。食卓に一緒に着いていても、私がついつい子どもの補助ばかりになって自分の食事ができていないと、次女に指摘されます(笑)。私のお茶碗やお椀を差し出して、「ママ、ママ(ママのご飯食べて)」と。そのたびに私もはっとして「そうだね、一緒にだね」と食べると、娘も確認してにっこりしてくれます。横にいるだけじゃなく、一緒に同じものを食べる喜びや安心感があるんだと思います。

上坂元 食べる喜びと安心感は、子どもにとっても大人にとっても大事ですね。

赤松 今、若い女性のからだづくりが、国としても重要な課題とされています。なぜならば、若い女性は、次世代の健康づくりを担っているから。つまり、自分だけのからだづくりではなく、世代を超えたからだづくりなんです。そういう観点から、若い女性が食に対して学べる機会を増やしたい。私が日々接している学生は食物栄養学科の学生なので、食に元から興味がある学生が多く、食について学ぶ機会もあるのですが、お茶大だけ見ても、そうではない学生がたくさんいます。

濱崎 作って楽しい、食べて楽しいっていう体験を身近にね。今は、包丁やまな板がなくても、食には困りませんものね。でも、子どもには、切ったりつぶしたりすることって楽しいし、大事なことですよね。

會退 大きな話になってしまいますが、働く

女性支援を考えていきたいなと思います。働きながら無理なく家庭でご飯を作っている姿を子どもに見せたり、一緒に食べたりすることができるといいな。女性支援があればいいな。その家庭での経験が、大きくなったときに自分が子どもだった頃を振り返ると思いが、温かな家庭の思い出の食につながると思います。

上坂元 ちょうどこの座談会をしているとき、新型コロナウイルス感染症の拡大で、世界中が大変な状況になってきています。その中で、外出が制限されることで、「家で料理をするようになった」という声がたくさん聞こえてきます。この座談会でも、子どもが育つ暮らしの中で、食べることの楽しさを大切にしたいと、あらためて感じることができました。

(2020年4月1日)

お茶の水女子大学附属幼稚園にて



児童の辨當

倉橋惣三

— 『婦人と子ども』^{注1} 第11巻第5号
(1911年) から —

小学校及幼稚園に於ける弁當の問題は、いろいろの点から見て研究を要すべきことが多い。第一児童の栄養の上からは勿論、教育上躰け方から云つても、又家庭の毎朝々々の心づかぬことである。そこで其の第一着の研究として、幼児の弁當の實際に就て調査して見た。左の表は昨年六月、東京女子高等師範学校附属幼稚園に於て、保姆諸君の熱心なる協力を煩わして、一ヶ月間毎日の弁當を調査した結果である。

右の表によつて、二三注意すべき点を挙げて見ると、第一、菓子麵麩の多いことは実に驚くべきことである。あんぱん、かにぱん、其他いろいろの名がついて居るが、要するに菓子の種

類に属すべきもの、子どもの間食用たるに過ぎぬ。それも綿密に注意する家庭に於ては、間食としても最理想的とは考へて居るものがある。それが五個六個、甚しいのは二個位でもつて、重要な一回の午食に代用せられて居るのである。しかも此の種の多数は附添人なり、甚しいのは幼児自らなりが、登園の途中買つて来るものである。即ち家庭の調理はおろか、検閲をだに経ざる弁當である。第一の栄養の点からの論は仮りに別としても、特に此の第二の点から見ても、菓子麵麩弁當は甚だ不賛成である。勿論此の現象の一面には、幼児が菓子麵麩弁當を好んで、おねだりするということは有力な事実でもあり弁解にもなる。併し、それだから菓子麵麩弁當を賛成するといふ訳にはゆかない。表を御覧なさい。此の種の弁當の割合は、保育料の高い本園幼児に比して、無料保育の分室幼児に於て殆んど三倍も多いことになつて居る。幼児の持つて来る弁當を一寸見ても、其の家庭殊に母親の、幼児に対する注意如何が察せられる。(勿論之れ

を以て、幼児に対する愛育の熱心の多少を直に断ずるのではない。生活の種類によって、心には思ってもその暇のない家も沢山ある。そこで独逸などで盛に行われつゝ、ある児童給食制度、即ち子どものお弁当の世話は、学校なり幼稚園で引き受けるという行き届いた方法の必要が起つて来る。

副食物の表に就ては、各食物の眞の滋養の大小、及び消化の良否等、専門の知識を待たなければ確な論断は出来ないのであるが、大体常識から考えて見て、いくつかの点に気がつく。第一、鶏卵、肉類、魚肉、に於ては其の割合に於て、分室が著しく本園に劣つて居る。それに反して、野菜類は分室の方が本園の約二倍以上になつて居る。鶏卵や肉類のみに滋養があつて、野菜類は滋養がないというのでは決してない。暮々もそんな暴論をするのではないが、斯うまで著しい割合の違いが出ては何となく考えざるを得ない。それから第二には、魚肉、野菜類其他に於て、常識的に考えて、随分如何かと思わ

れるものが少くない。

併し、斯くいつて来れば、如何にも心なく批評のみして居る様になるが、吾等の此の研究の心は必ずしも、そのみではない。此の表が大體に於て示す所、殊に「かわり飯」の一項が示す所は、それぐゝの家庭に於て、如何に弁当問題に心を勞して居らるゝかを察するの好資料である。尚々此の種の研究が進んで、衛生学上からと教育上からの協同研究が充分行われて、成るべく手数のかゝらない方法で、成るべく良き弁当を作る法が教えられたならば、児童の幸福は勿論、家庭に於ても、どの位幸福であるかと思ふ。(後略)

注

- 1 第1巻第1号、第18巻第12号の弊誌の名称。
- 2、3 表は省略しました。
- 4 農村や一般庶民の子どものために国が普及させようとした簡易幼稚園のモデルとして、明治25年に東京女子高等師範学校附属幼稚園に設置された、3〜5歳の混合クラス。

* 本文は新漢字、現代仮名遣いにし適宜ルビを振りました。
(編集部)

寄り添うことと表現

砂守頼子

(保育士)

寄り添うことについて

私は今まで数年間、幼稚園・保育園で保育をしてきました。仕事量が多く、毎日大忙しの日々を過ごし、子どもたちと笑いあうことが少なかったと感じていました。

現在の保育園、こどもなーと保育園では、子どもたちの創造力を豊かにしていくことを大切にし、日々の保育を行っています。小規模保育園ということもあるかもしれませんが、子どもたちとの距離が近く、一人ひとりのやりたいことや表情をしっかり見ながら保育が

行えて、毎日が楽しくて仕方ありません。た
くさんのことを見たり触れたりする中で子ど
もたちに寄り添い、大人目線の保育でなく、
子どもに近い目線で、子どもたちがどう発展
させて遊ぶのかを見守っています。そうする
と、子どもたちは、私が想像していることよ
りももっといろんな発見・発展をしていき、
子どもたちの創造性というものの素晴らしさ
に気づかされました。

絵の具で遊ぶことについて

ある日、絵の具を使った活動をしようとい

うことになりました。今までの私の経験では、
絵の具をパレットに出して、「○○を描きまし
よう」とモチーフを決めて筆で描くというの
がいわゆるお絵描きで、絵の具を使った活動
だと思い込んでいました。もちろん、こども

なーと保育園でも落ち着いて絵を描くことも
ありますが、大きな画用紙にみんなで大胆に
描いていくことを大切にしています。「○○を
描こう」と始めることはなく、パレットにも
絵の具を入れず、直接絵の具のボトルから画
用紙にポタポタと落とし、その場面からもう
子どもたちの絵の具遊びは始まっていきます。
落ちた絵の具の形が「恐竜の足みたい」と、
うれしそうに話をし始める子どもたち。何を
描くのかは子どもたちの中にある創造力から
生まれるのだと、その時に感じました。すぐに
子どもたちは絵の具に飛びつき、手や足で絵
の具の感触を楽しみながら、好きな色、色の

混ざり具合、描いたものが何に見えるか……
などたくさんのお絵描きを絵の具から感じなが
ら、保育士に「ぬるぬるする」「雨みたい」
とどんどん話をしてくれます。

子どもたちの楽しく描く姿に、私も楽しく
なり、手も足も絵の具まみれになりながら一
緒に遊びました。子どもたちが手足で直接絵





の具に触れるとどう感じていたのかをあらためて実感し、絵の具の冷たさ、感触、手の形が描ける、いろんなものに見えるなど、数えきれないほどの経験を子どもたちと一緒にすることができました。

中でも、Sくん（2歳児）は体全体で絵の具を感じ、予想を超えるその描き方にびっくりしました。髪の毛まで絵の具まみれになり、

自分の髪の毛を筆のようにして描いているのです！ 以前の私なら止めていたところですが、Sくんの真剣な顔、楽しそうな表情などに引かれ、Sくんに寄り添い、見守っていました。髪の毛で描けた跡を見て、「先生見て！」と言ったSくんの満足そうな顔、楽しそうな顔に私まで笑顔になります。私や他の保育士の笑う姿にSくんもさらに楽しくなり、時間を忘れてどんどん描いていました。

表現するところ

この絵の具遊びだけではなく、子どもたちの遊びの中ではびっくりするような行動、発見がたくさんあり、子どもたちは体全体でそれを表現しようとしています。その表現の仕方はさまざまかもしれませんが……。表現するのが難しい子もいるはずですが、その表現したいシグナルを身近にいる私たち保育士がたくさん見つけ次の表現へと広げていくことで、

かけになりました。

子どもたちの活動がアートになっていくのだと感じます。Sくんもそうですが、子どもたちがやりたいと思うことは、保育士が考えている活動よりはるかに素晴らしいことを考えています。保育士の目線でなく子ども目線で考えてみる。子どもたちが触るものを同じように触り、一緒に感じる。子どもが何に興味をもち、どの部分を見ているのか？ それは何に見えているのか？ 次はどう表現したいと思っているのか？ 子どもたちに寄り添ってかわることで、その発見を保育士も見つけることができるのではないかと考えます。あの時Sくんの行動を止めてしまったら、Sくんの表現というものがアートとして生まれなかったはずですし、一緒に楽しさ、うれしさを感じることができなかったかもしれません。私自身の子どもたちへのかわり方を深く考えさせられる、ひとつのき

現在の私は、主任保育士という立場で、担任のときと子どもたちへのかかわり方が少し変わったように思います。しかし、担任として子どもたちにたくさんかわる保育士たちが、私以上に子どもたちの声を聞き、子どもたちの目線に目を配り、日々の生活や活動を素晴らしいものにしていくていっています。保育士もみんな同じではありません。子どもたちと同じく十人十色ですが、子どもたちに寄り添う気持ち、方向性をお互いに共有したい、これからも多くの活動、表現を子どもたち、保育士たちと築き上げていきたいと思っています。

実践 ファイル

3園合同研究会の取り組みから 日々の生活の中でのつながり

その1

佐々木麻美
杉浦真紀子

(幼稚園教諭)

お茶の水女子大学には、附属幼稚園、附属
いずみナーサリー(以下ナーサリー)、文京区
立お茶の水女子大学こども園(以下こども園)
と、同じキャンパス内に3つの異なる乳幼児
施設があり、日常の保育の中で、学内で自然
に出会ったり、季節の行事の折に交流したり
しています。2016年に立ち上げた3園合
同研究会を基盤として、それぞれの研究会や
公開保育、フォーラム等に参加しあうことを
重ねてきました。さらに2018年、附属幼
稚園が、文部科学省の研究開発校に指定され、
「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚

園の教育課程の編成及び保育の実際とその評
価の在り方について」というテーマで研究を
始めるにあたっては、ナーサリーとこども園
の協力を得ながら、互いの施設の保育に参加
し、2歳児の育ちについて語りあう時間を少
しずつ重ねられるようになりました。

こうした3園の交流・連携の経緯や保育実
践について、2019年の日本保育学会におい
て、初めてポスターによる発表を試みました。
園の枠組みを超えて研究に取り組むことで、
子どもの育ちが0〜5歳とつながっていく
ことが実感できる

佐々木麻美 (ささき あさみ)
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

杉浦真紀子 (すぎうら まきこ)
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭

・ 日常の中の偶発的な出会いを生かすことで、子どものみならず保育者同士の学びが深まる

・ 3園の保育のつながりが感じられる

等の気付きが得られ、学びにつながりました。3園は、施設の形態が異なり、流れる時間や空気感も異なります。それでも、日常の出会いや、子どもを真ん中にして語りあう時間を重ねていくことの大切さを、あらためて感じることができました。

今回は附属幼稚園の環境を生かした実践の事例を報告します。

報告① ジャガイモを届ける

附属幼稚園の4、5歳児は、6月にジャガイモ掘りに出かけます。畑は園から電車に乗って行く場所にあるため、3歳児は幼稚園で留守番でした。そこで5歳児は、自分たちが

掘ったジャガイモを翌日、園で待っていた3歳児に、お土産として袋に入れて渡しました。また、こども園やナーサリーにも届けようと段ボール箱に詰め、数人ずつで抱えて出かけて行きました。自分たちが掘って食べるだけでなく、このように園を超えて人とつながる場所があることは、とてもうれしいことです。こども園では、迎えてくれた子どもたち一人ひとりにジャガイモを手渡すと、両手で大事に持って「ありがとう」と笑顔を見せてくれました。ナーサリーでは、小さい子どもたちが「なんだろう?」と段ボールへ手を伸ばし、ジャガイモを触る姿を、5歳児がじっと見ていました。先生方も後日顔を合わせたとき



に、ジャガイモを料理して食べたときの子どもたちの様子を話してくれます。子どもたちの足で届けられる距離に3園があることで、ジャガイモ掘りの経験が人と人のつながりを豊かにしてくれました。

報告② 影絵を観に来てもらう

附属幼稚園では毎年12月の終業式の日、子どもたちと保護者に向けて影絵を上演します。昨年度は「アラジンと魔法のランプ」でした。この影絵は、教員が人形や背景を手作りしたもの、代々大切に補修しながら使い、教員自身が演じます。11月下旬になると舞台を設置し、セリフをテープに吹き込んで準備を始めます。それから、人形、背景、音響と役割を分担後、人ともとの背景が自然に動いて見えるようにタイミングや位置を合わせて動かし、体に染み込ませるように日々練習を重ねます。

上演する影絵には、私たちも思い入れがあり、ぜひ子どもたちにも観てもらえたらと、別の日に小さな上演会を開いて招待すると、5歳児の約20名が幼稚園まで足を運んでくれました。玄関で靴を履き替え、わいわいと話しながら、遊戯室の舞台の前に着きました。部屋がだんだんと暗くなり、音楽と共にスクリーンに影が映し出されると、「はじまったー」という喜びの声と題名を読む声、が聞こえ、裏で必死に操作をする私たちにも、次第にじつとスクリーンに見入る息遣いが伝わってきます。お姫様が、ランプ売りに化けた悪い魔法使いに気づかず、古い魔法のランプを新しいランプと交換してしまふシーンでは、「あげちゃだめ!」「あくあ」と思わず声が出ます。上演後、



子どもたちの感想で、「どうやっていたの?」と聞かれました。実際に使っていた人形を目の前で動かし、仕掛けを見せたときのぐっと惹きつけられていた顔は忘れられません。

その後、こども園の先生から、影絵ごっこが始まったと聞きました。幼稚園の子どもたちと同じものを見て、何か感じる時間があるのなら、とてもうれしいことです。

報告③ クリスマスツリーを見るに……

冬休みのある日、ナーサリーの子どもたちが附属幼稚園の園庭で遊んでいたときに、クリスマスツリーを見に来たいと言ってくれました。幼稚園の静まり返った玄関に、子どもたちが飾りを付けたクリスマスツリーがあります。1〜2歳の小さな子どもたちはツリーを見上げ、触ろうと手を伸ばし、そのうちツリーの周りをぐるぐる回り始めました。冬休

みになり、幼稚園での役目を終えていたツリーも、小さな子どもたちに囲まれ、どこかうれしそうでした。そして先生が「うさぎのはらのクリスマス」を歌うと、子どもたちも一緒に歌い始めたので、急いで卵型マラカスを出してきて渡しました。手に持って鳴らしたり飛び跳ねたり、楽しい気持ち音がリズムになって、体が弾んでいました。ほんのひと時のことでしたが、幼稚園の子どもたちといろいろな飾りを作ったツリーを飾った時間とつながった、ほんわかとした温かい時間でした。



こうして近くにある3園が、それぞれの生活がありながら、日々の中でつながれる時間を、大切にしていきたいと思います。

保育をつなぐ

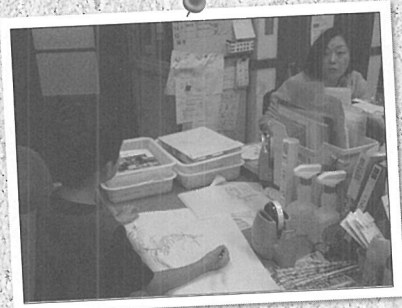
～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.7

職員室 — 子どもたちの拠り所



嶋田博美



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」第7回は、職員室で仕事をする事務補佐員の方に思いを綴っていただきます。

子どもたちは園生活の中で、教員、用務員、事務職員とそれぞれの立場で働く大人と出会い、かかわります。とはいえ、子どもたちにとって、園内でかわる大人がどういう立場で働いているのかは、あまり大きな意味はもたないのかもしれないかもしれません。事務の仕事が主であっても、子ども理解や子どもへの働き掛け、そして担任との連携には、多くの配慮や工夫が込められているように思います。子どもたちにとっては、どの大人も大切な先生です。また教員にとっても、職員室で共に仕事をする時間の中で、忙しさをうれしさ等々を共有する存在です。

筆者の子どもとのかかわりや子ども理解は、教員や保護者にも多くの示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

嶋田博美（しまだ ひろみ）

お茶の水女子大学附属幼稚園事務補佐員。

*

以前、保育者として働いた経験があり、子どもたちの傍らで再び仕事ができたらうれしい、そんな思いもありながら、幼稚園の事務補佐員として、日々忙しく駆け回る先生方をサポートし、早いもので今年の9月で5年目を迎えます。

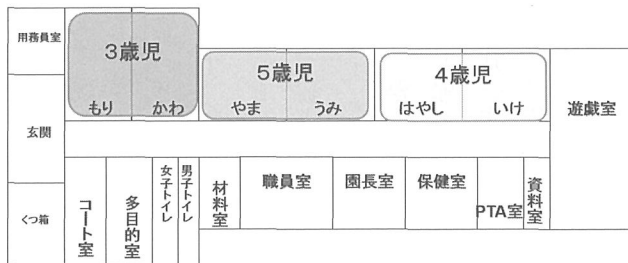
幼稚園での生活

私が一日の大半を過ごすのは、園舎の中心部、年長「海の組」の前に位置する職員室です(下図)。電話や来客応対、配布物の準備や会議室の手配、会計にかかわる事務処理などにあたっています。行事の手伝いで調理をすることや、子どもと言葉を交わす機会も多く、園児とは毎日何らかのかかわりがあります。そのため、机に座ってコツコツと作業をする一般的な事務の仕事とは少し違う雰囲気です。

子どもたちは、

登園して支度を済ませると、保育室や園庭、遊戯室や廊下に保健室と、さまざまな場所で思い思いに遊んでいます。中には職員室に来る子どももいますが、滞在するのはだいたい5〜10分程度の短い時間で、毎年顔ぶれは年長児が中心です。たまに勢いよく扉を開けて飛び込んでくる年少児も。そして3学期に入る頃には、照れた笑みを浮かべた年中児が、一人もしくは友達と一緒に訪れるようになります。

園内見取り図



職員室から眺める園の風景

幼稚園の庭には、春にタケノコ、夏に梅、秋には柿やシイの実、冬は夏ミカンなどが豊かに実り、先生と子どもたちは収穫した後、タケノコならば小さく切ってスープにしたり、梅は凍らせて氷砂糖に漬けてジュースにしたり、シイの実ならばフライパンで炒るなどのいろいろな調理をして、園の生活で自然の恵みを味わっています。

こうした活動が始まると職員室でも、副園長先生と私で夏ミカンなどを人数分に切り分け、お弁当の時間や降園前に間に合うよう保育室へ持っていく日々が続きます。

私はこちらの幼稚園に来て驚いたことがいくつもあります。園児が皆、スーパーマーケットではまず見かけることのない青くて酸っぱそうな夏ミカンを食べ、「いい匂い」「酸っぱいけどおいしい！」とうれしそうに味と

香りを楽しんでいる様子や、柿の味見をして、どれが渋柿かを当てようと、自分の舌で渋みの感覚を知ろうとしていることなどです。今の時代に都会で暮らす子どもが、自然をありのまま、全身で受け入れて喜びを感じている姿はとても新鮮で印象に残っています。

「〇〇くんはね、柿を採るのがすごく上手なんだよ」と、大きな柿がたくさん入った籠を大切に抱えて、洗ってほしいとやって来た子どもが詳しく話してくれます。今年は豊作なのか不作なのか、どの木の、どの高さの柿が甘いのか、渋いのか、そして誰と誰が一緒に遊んでいて、柿の収穫を楽しんでいるのか、外の様子が手に取るようにわかるのです。園児たちは、静かな職員室にも扉を開けて四季折々の風景を運んでくれます。こうした調理活動などに携わること、私自身にとっても、日々の発見や感動につながる貴重な体験になっています。

職員室を訪れる子どもたち

職員室を訪れる子どもには、それぞれ何らかの目的や用事がある場合もあれば、ちょっとひと休みしたいなど、その姿はさまざまです。子どもたちに私からは、できるだけ担任の先生に「これから職員室に行ってきます」と伝えてから来るようにと声をかけています。

描いた絵や路線図、作った物を見せてくれる子、作った工作が壊れてしまったので直して補強してほしいと持ってくる子、読んでいる本や遊んでいる道具を少しの間預かってほしいという子、鉛筆を削ってほしいという子、特に用事はないけれど静かな所で過ごしたくなったという子、先生や友達を探している子、自分の落とし物が届いていないか聞いてくる子、一人ひとりの気持ちを聞きながら、次第に子どもの顔と名前がわかるようになります。

よくある光景なのですが、先生に頼まれたお使い事をもって、年長児が2、3人一緒に行って来ることがあります。お皿やスプーン、箸や箸やおたまじゃくし、水切り籠やコップ、塩やしょうゆといつた調味料などを「職員室でもらってきてね」と、先生が子どもに託しているのでしょう。先生たちは恐らく、託したことを子どもが理解し、職員室に行ってきたことと伝えることができますようにとお使い事に願いを込めている、……私はその思いを受け取っていました。

そのため、目の前にやって来た子どもが何を取りに来たのか、どうしてほしいのかをよく聞き取り、必要なものを用意するのですが、例えばお皿やスプーンなど、いくつ必要なのかは聞かずに来てしまうこともあります。

私は「数はいくつ持っていく？」と尋ねて子どもに決めてもらうのですが、一瞬「どうしよう……」と友達とお互いの顔を見合った

後、その場で小さな会議が始まります。A児が「今日は山（の組）と海（の組）の両方に使うから、三つか四つあったほうがいいかな」と言えば、B児が「じゃあ、3人で来ているから、一人一つずつで、三つ持っていこうよ」と言い、C児が「そうだね、足りなかつたらまた来ればいいよね」と話しあつて決まりま

す。このようなほほ笑ましいやり取りも、職員室のキッチン前でよく繰り広げられています。

ある園児との出会い

鉄道ファンの園児によく出会うのですが、今年も全国の電車や路線、駅名に詳しい子がいました。「（職員室は）静かだから」と言つてよく一人で来て私の隣の椅子に座り、全国の路線図や、自分の心の中にある「空想の路線図」というものを黙々と書いていました。複雑な東京の地下鉄にも詳しく、〇〇駅から

〇〇駅に行くための最短の乗り換え方法を教えてくれたり、よく乗る電車や使う駅がどこかといったことを、私はパソコンに向かい、その子は紙に向かいながら話していました。しばらくたったある日、ふと「そういえばあの子は最近来なくなつたな」と気づくと、友達と一緒に保健室で書き物をしている姿を見かけました。久しぶりに「ねえ鉛筆貸して」と職員室に来たの

で、「最近は何して遊んでいるの?」と聞くと、「〇〇くんと路線図書いてる」と答えました。二人とも鉄道ファンだと知っていましたが、「〇〇くんは僕より駅に詳しくて書くのが早い



の。上には上がいる」と私に言いました。友達の良いところを認めて、自分ももっと頑張ろうと思っている気持ちが伝わり、温かい気持ちになりました。そして、一緒に楽しく遊びながら切磋琢磨できる良い友達との出会いがあったことを私もうれしく思いました。

保育者の一人として子どもとかわる

その子に限らず、職員室に一人で来て時間を過ごしていた子どもがある日から来なくなると、だいたい、友達と一緒に遊んだり走ったりしている様子を見かけます。毎日のようにそばで見ている顔が遠くなるのは少しだけ寂しいけれど、子どもが職員室に来なくなるということは、困っていた何かが解消されたとか、友達との出会いがあったなどの良い兆しなのかもしれないと思うようになりました。

私は、かつて保育者として勤務していた職

場で、3歳児クラスの担任をしていたときに、右肩を脱臼するけがを負いました。治療を続けたものの、度重なる肩の不調に悩まされ、完治は難しいと病院で診断を受けました。子どもを抱えたり、一緒に走ったり体を動かしたりすることや、テーブルや重い物を持ち運ぶといった日常的な動作も長くできないと将来への限界を感じていた中、現在の園にご縁を頂き、入職して事務補佐員に着任しました。職員室は、決して遊び込む場所ではないけれど、何かあったときには私を頼って訪ねられる場所で、先生ほど身近ではないけれど、頼りにできる大人がいる場所だと、園児が心の片隅に感じながら幼稚園で過ごしていただけたらいいなと願っています。

これからのチャイルド・スタディーズを展望して③

社会の視点から考える幼児教育の試み

小玉亮子

(大学教員)

グローバル社会の中で

昨日のように今日が来て、今日のような明日が続く、わけではないことを、思いがけず私たちは日々痛感している。このところ自然の脅威から災害が頻発していると思っていたら、今年の始めには予想もしなかった *COVID-19* コロナの時代を今、経験している。対岸の火事という言葉があるが、川向こうの火事を他人事のように思っていたら、あつという間に火の粉が飛んできて、それは瞬く間に世界中を覆う大火となってしまう。

他方で、アメリカのミネソタで起こった一人の黒人男性の死は、*Black Lives Matter* というスローガンのもと、社会の差別と分断を告発する運動となって世界中に拡散している。そして、このアメリカの差別の問題は日本でも対岸の火事ではないことを、日本で放映されたアニメの黒人像をめぐる問題が可視化することとなった。

世界中であつという間に広がったこの二つの問題もまた複雑に接続している。コロナの感染者数に地域差があることが明らかになり、またそこには、経済的、社会的、そして「人種的な」格

差があることも明らかになってきている。二つの問題は、格差と差別という点で絡みあい、また、瞬時に拡散していったという点でも重なりあう。

子どもたちが今生きている社会は、こういった社会である。私たちの目の前にいる一人ひとりの子どもは社会の変動と無関係に笑っているわけではなく、無関係に走り回っているわけでもない。そういう視点、つまり社会の視点から幼児教育を考えることができないうか。

失われた領域「社会」と領域「自然」

私たちがよく知っている言葉に「五領域」がある。改訂された幼稚園教育要領をはじめとするいわゆる三法令（平成29年告示）では、教育の内容としての五領域は以下のように変わらず示されている。「各領域は、これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人とかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示したものである。」（幼稚園教育要領 第二章）

「人とかかわり」や、「身近な環境」が、幼児教育の課題として位置づけられているのであるが、ここには、「社会」という言葉がない。平成元年改訂の幼稚園教育要領から「自然」と「社会」が失われて以来、今回の改訂でも喪失されたままとなっている。身近でない自然や、周りの人以外の人は子どもにとって無関係だろうか。むしろ、身近な川が大雨によって氾濫することを目の当たりにし、政府の stay home の要請によって園にも公園にも行けなくなっているのは、子どもたちである。目で見える範囲で起きる身近な出来事が、その背後のコンテキストと無関係でない

ことを子どもたちは理解できない、のだろうか。

「感じる」と「考える」

こういった問いを考える手がかりを、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児学校の教育実践に見いだすことができるのではないか。

レッジョの日本での受けとめ方については佐藤(2020)に委ねたいと思うが、ここでは、アメリカでのレッジョの受けとめについて興味深い指摘があることに言及しておきたい。ヘンドリックスは、レッジョの実践で「美術材料」を使うことに注目して次のように言う。アメリカではこういった材料が「子どもたちが自分の感情を表現できる」ところに利点があると考えられているのに対して、イタリアの幼児学校では、「絵画用教材を与えるねらいを子どもたちが自分の『考え』を表現できることのほうに置いているように思えます」(ヘンドリック 2000: 29)と指摘する。つまりここでは、アメリカでは子どもが「感じる」ことを描くことが重視されるのに対して、レッジョでは、子どもが自分の「考え」を描くことに目的が置かれるというのである。この二つの違いを見るとき、さしずめ「非認知」という言葉が注目されている日本はアメリカに近いと言えるのかもしれない。

子どもと社会

ダールベリとモスは、豊かな(ricca)子どもというイメージがレッジョにはあるという。そのイメージを基礎づけているのは、子どもはすべて「知的」であるという理解だという。すべての

子どもたちは世界を意味づけるという大仕事に乗り出しているのであり、知識、アイデンティティ、価値を構成するという不断の作業を常に行っているという。このような世界を意味づけ、価値を構成する子どもという理解に基づくなら、「すべての子どもは民主主義的な権利の主体であり、コミュニティの市民として認知されなければならない」(ダールベリ・モス 2019: 17-18)。

子どもたちは考えている。考える子どもは、社会を構築する子ども、権利の主体としての子ども、市民としての子どもでもある。そう考えるなら、社会という視点は、幼児教育にとって不可欠なものであると言えるのではないだろうか(小玉 2020)。社会の視点から幼児教育を構想するとき、園の扉や門を越えて子どもと保育者と親と、さらに地域と国家と世界で生じるさまざまな出会いと、多様な諸関係の絡み合いが、立ち現れていくのではないだろうか。その先には、いわば「脱中心化」した子ども学という「ユートピア」があるのかもしれない。

参考文献

- ダールベリ・G、モス・P (2019) 「われらにとつてのレッジョ・エミリア」リナルデイ・C / 里見実訳 『レッジョ・エミリアと対話しながら』ミネルヴァ書房 1-31.
- ヘンドリック・J (2000) 「アメリカの保育がレッジョ・エミリアから学んだもの」ヘンドリック・J 編 / 石垣恵美子・玉置鉄淳監訳 『レッジョ・エミリア 保育実践入門』北大路書房 26-34.
- 小玉亮子編 (2020) 『幼児教育』ミネルヴァ書房
- 佐藤学 (2020) 「レッジョ・エミリアの教育とピーター・モス教授に学ぶ教育学の新しい物語り」『発達』ミネルヴァ書房 162: 21-25.

日本語で外国人と付き合う

長田恵子

(日本語教師)

皆さんは「日本語学校」をご存じですか。

日本に来る留学生の中で、日本語力のある人は直接大学や専門学校に入りますが、日本語自体をまず勉強したいと考える人は、日本語学校か大学の日本語別科に入ります。2019年度のデータによると、全国で774の機関があり、約9万人余りの外国人が日本語を学んでいます。近年日本のアニメやゲームなどのポップカルチャーが有名になるにつれ、留学生も増えてきました。私は大学の専門は児童学で、初めは幼稚園で働いていましたが、第二の仕事として全く畑違いの日本語教師を選び、20年以上東京の日本語学校で非常勤と

して働いています。

日本語学校の授業の初日は、どんなにベテランでも、どんなに上手な先生でも緊張し、ドキドキしながら教室に入ります。特に新生のクラスは、世界各地から「日本に来たくてたまらなかった、やっと来られたよ!」というような顔をした学生たちが、期待に満ちた目で私たちを待ち構えているからです。「こんにちは!」「初めまして!」。私たちは媒介語なしの直接法で日本語を教えています。ここは、日本に居ながらにして世界各地の人と出会える、本当にすてきな場所なんです。授業中は、あちこちの教室から大きな笑い

声や拍手、「えーっ？」と驚いたような声が聞こえてきます。「勉強は面白い」「学校が楽しい」、こんな声がよく聞かれます。全然話せなかったのに、毎日少しずつ言葉や表現を覚え、言いたいことが言えるようになる、自分の話を通じ、相手の話がわかる、そして、さまざまな国のことを知る……毎日が驚きと発見と喜びに満ちています。教え方は、対話の形で導入し、日本語教育独自の文法で教え、ペアやグループで話させたり、ゲームをさせたりで準備も大変です。また、話の展開に臨機応変に対応し進めていくので、難しさややりがい、そして楽しさも満載の仕事だと思えます。

私がこの仕事を始めた1996年頃は、日本の経済力に魅かれて、アジアからの留学生が数多くいました。日本で先進技術を学び、帰国後は国の発展に貢献したいという若者たちでした。その頃授業の中で聞いた話です。ある韓国人の男性は、徴兵され軍隊にいたと

き、北朝鮮との国境警備の任務に就き、真夜中の寒さの中、ふと見上げた空の、満天の星が美しかったと。また、ある台湾の学生は、やはり軍隊で、汚泥の川の中を泳がされ、皆腹痛を起こした話を、またあるスリランカ人の学生は、高校の遠足で、象たちが川へ水を飲みに来たのを木立に隠れて見たときの興奮を話してくれました。自分では経験できない話にみんなで聞き入ったのを覚えています。

秋の季節には教室を飛び出し、当時近くにあった神宮外苑へ、イチョウを見に出かけたことがあります。黄金色の世界の中を、イチョウの落ち葉を舞い上げながら学生たちと弾むように歩いた経験も忘れられません。飲み会をしたり、一緒に阿波踊りや花火を見たり、自宅に呼んでパーベキューをしたりと、授業以外での交流の思い出も、私の心の大切な宝物となっています。

その後、学校は秋葉原の近くに移転し、学校の方針で多国籍の学生たちが来校するよう

になりました。しかし、2011年に起きた東日本大震災と原発事故の影響で、ほとんどの学生が帰国してしまい、状況は一変しました。それでもしばらくして落ち着くと、学生たちは徐々に戻ってきてくれました。

その頃日本のアニメやゲーム、ファッション、和食などの人気が世界的にも高まり、観光客も留学生も増えてきました。秋葉原という地の利もあり、外国人のオタクの人たちも多く来ました。あるスウェーデン人は「オレ様は〜」みたいな話し方をするし、別の学生は、アニメの中の決めゼリフをすらすらと言うし、メイドカフェへ行っただという話題もよく出ました。一方で、祭りや花火のように伝統文化を守っている日本人の姿に感動する学生も多くいます。熱烈な相撲ファンになって、必ず国技館へ足を運び、みそ汁と納豆を食べていたアメリカの学生、戦国史が大好きで、大学の史学科に入ったロシア人、日帰り旅行の日光江戸村へは着物を着て行くという意気

込みのベトナムや南米の学生など、日本にハマル学生も結構います。

よく学生たちに「あなたにとって、大切なものは何？」と聞くと、迷わず多くの学生が「家族」「友人」と答えます。昔も今も変わりません。私たちは、今でこそ大きな天災や新型コロナウイルス感染症の世界的流行を経験して、家族や友人、何気ない日常の生活がいに貴重であるかを体感していますが、以前は成功や目標達成などが大切だと思っていた人も多かったと思います。しかし、外国の人たちは、ずっとぶれていません。そして大切なのは家族だけではなく、困っている人を見たら、手助けをする、それは当たり前のことと考えています。「先生、道でおじさんが倒れているのに、日本人は誰も助けてあげません。なぜですか？」と驚いているイタリア人がいました。恥ずかしいです。また「電車の中で乗ってきた老人に席を譲ったら、逆に怒られたんです」としよげている中国の学生も

いました。悲しいです。彼らにとつて当たり前のこと、人間としての基本的な思いやりを教えられます。本当に心優しい人たちです。また、成績が伸びなくても諦めず、一途に明るく努力して夢を実現させた学生たちもいて、私は彼らを心から応援するとともに尊敬し、自分もそうしなければと励まされています。

私たちの学校では年に1回、スピーチ大会が行われます。もちろん日本での心に残った経験を話す学生も多いですが、疑問を投げかける学生もいます。なぜ日本では、銀行の窓口へ行かなければならない？ まだ紙の通帳なんて使っているの？ 中国ではお年玉のやり取りも、ホームレスにあげるお金さえ電子マネーでできるのに、なぜ日本では現金？ 「#KUTOO運動」を知って、こんな男女差別があるなら、日本で働きたくないと怒る学生など、批判もたくさん出てきます。春の新型コロナウイルス感染拡大のときも、日本の対策は甘すぎると怒っている台湾の学生が

いました。留学生は日本が大好きですが、批判もきちんとしてくれます。私たちが気づかない良いところも悪いところも教えてくれます。

今後日本に住む外国人も増え、多文化共生社会へ移行していくでしょう。私が今まで、何百人かの外国人学生と日本語で付き合ってきたと言えることは、日本人も外国人も同じ人間として、根底は何も変わらない、ただ一人ひとり個性が違うだけということです。外見の違いも個性に過ぎません。日本に住みたい人に日本語教育の機会がきちんと与えられれば、私たちは日本語で楽しくお付き合いできます。ある学生が初めて日本に来たとき、神戸でおばあさんに「おはようございます」と言われてとてもうれしかったと話していました。もし、皆さんの近くに外国人がいたら、ぜひ気軽に日本語で声をかけてみてください。そこから世界は広がるでしょう。

ニューヨークでの保育園・幼稚園選びの経験

宝月理恵

(大学非常勤講師)

新型コロナウイルスの感染拡大で外出自粛が強く求められた春の連休中に6歳の誕生日を迎えた息子は、生後6か月から13か月までお茶の水女子大学附属いずみナーサリーに通っていた。後ろ髪を引かれながらナーサリーを離れたのは、

夫の住むニューヨークに移るためである。ニューヨークでのウイルス感染の広がりや混乱を目にすると、かつて私たちが住んでいたニューヨークとは全くの別世界になってしまった感がある。終息はいつになるのか現時点(2020年5月初旬現在)では予想もつかない心苦しさがあがるが、この小稿では、私と息子が過ごしたニューヨーク州ウエストチェスターカウンティで

の幼児教育選びの経験について記憶をたどりながら綴ってみた。なお、私は幼児教育の専門家ではないため、あくまで個人的経験を基にした随想となることをお許しいただきたい。

私たちの住まいはマンハッタンのベッドタウンともいべき緑豊かな郊外にあった。夫は当初マンハッタンの職場近くの高層アパートメントに一人暮らしをしていたが、家族の渡米に伴い、通勤圏内の郊外で新しい家を見つけた。郊外に住めば、車が必要になる。私は運転免許取得の準備を始めるとともに、息子の預け先を本格的に探し始めた。アメリカの教育行政は州ごとに異なるが、ウエストチェスターカウンティ

宝月理恵(ほうげつりえ)

専門は医療社会学、衛生史。夫の転勤により3度の海外転居を経験。研究と子育てとの両立を模索中。

ではキンダーガーデン (Kindergarten) から義務教育のシステムが始まる。通常小学校に併設されたキンダーガーデンには5歳児が入学するが、それまでは、プリスクール、ナーサリー、デイケアセンターと呼ばれる日本の幼稚園・保育園相当の教育・保育施設がある。なお、キンダーガーデンは無償で提供される義務教育であるが、プリスクール、ナーサリー、デイケアは基本的に営利目的の私立 (Private) であり (教会系など例外もある)、教育費も日本と比較すると高額となる。そのため、キンダーガーデンに入るまでは親族間で乳幼児の面倒を見るケースも多く、高所得層にはベビーシッター (ナニー) という選択肢もある。

さて、息子の預け先選びは難航した。私はいくつか締切りのある原稿を抱えていたため、週2〜3日でも自分の時間を確保する必要があった。また集団保育の利点もあと考えていた。まずは当時の息子の年齢 (1歳) でも入ることができるデイケアやナーサリーを探し出し、い

くつか見学して回った。自宅の一部で乳幼児を預かるホームデイケアも見学した。結局、渡米後3か月にして、複合オフィスの一角にあるチーン系のデイケアセンターに預けることを決めた。決め手となったのは、ディレクターの対応と規約や運営方針の明確さにあったが、しばらく手探り状態での消極的な選択だった。

そして、その迷いは息子にも伝わったようだった。数時間の慣らし保育が始まったが、息子は慣れない環境に驚き、戸惑い、泣いてばかりいた。泣き疲れて汗をかいた姿に、連れ帰るときは罪悪感にかられた。先生の様子 (当然ながら「外国人」である)、飛び交う言語、教室の雰囲気などすべてが彼の目には新奇なものに映ったようだった。まだ言葉が出ない息子にとって、不安な気持ちを泣いて表すことしかできない。私も昼寝の時間 (nap time) に靴を履いたままベビーベッド (crib) に寝かされる子どもたちを見て、カルチャーギャップを強く感じた。細かく年齢区分があり、数か月ごとに進級する

(move up)ことや、先生の入替わりの激しさも、息子と先生との愛着関係の形成を困難にしているように感じられた。さらにデイケアで提供されるランチやスナックにも驚かされることが多かった。シリアルやパンケーキ、マフィンなどが紙皿で提供され、残された食品は紙皿ごとゴミ箱に直行だった。

デイケアに通わない日は、自宅近くで開催されていた日本人の先生による親子教室に参加した。ここでは日本語の歌や手遊び、絵本の読み聞かせや工作が行われており、息子は楽しく通った。またウエストチェスターには日系幼稚園があり、そこでも未就園児を対象とした親子教室が行われていることを知り、少し遠いが参加してみることにした。見ず知らずの場所に連れてこられた息子は、デイケアの朝のように自分だけ置いて行かれるのではないかと身を固くして私にしがみついていたが、しばらくして私が一緒にいるとわかると、安心しておもちゃに手を伸ばし遊び始めたことを今でも覚えている。

現地のデイケアと日本語の親子教室とに並行して通う日々が続き、次第に言葉を発し始めた息子は自己主張も始めた。それは明確なデイケアの拒否であり、私はいつそう葛藤することになった。現地のデイケアはインターナショナルな環境でアメリカの言語と文化を経験する場であるとともに、親にとってはフレキシビリティが高いことが魅力であったが、明らかに息子は日系幼稚園を好んでいるようだった。2歳を過ぎ、デイケアで周囲の子どもたちが次第に英語を話しだす中で、日本語を母語とする息子は意思疎通に不自由さを感じていた様子で、朝の出発時間には行き渋り、園ではおもちゃをシェアできずお友達にかみついてしまう事件も起きた。お迎えの時間にはけろりとしていたことも多かったものの、悩んだ挙句、私は意を決して日系幼稚園の入園手続きを済ませ、息子を転園させることにした。

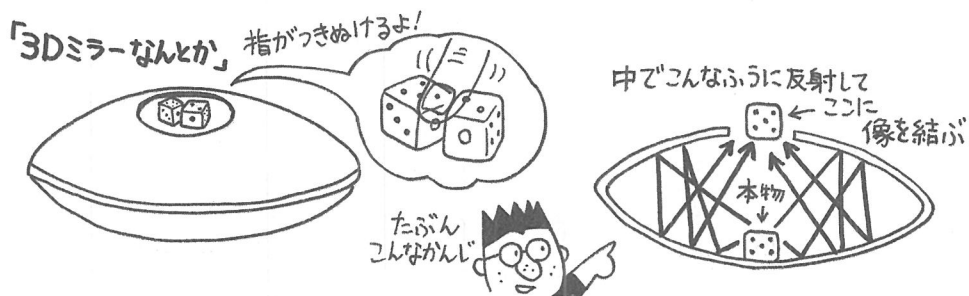
結果として、日系幼稚園での数年間は母子にとって素晴らしい経験となった。40年の歴史を

もつその園は、ニューヨークという異国で日本語による日本文化に親しむ保育を提供することをモットーとしていた。すでに親子教室に通っていた息子は、初日こそ泣いたけれども、馴染むのに時間はかからなかった。ハロウィン、感謝祭、クリスマスといったアメリカの文化はもちろん、お正月の餅つき、ひな祭り、夏祭りなど日本の文化にも親しむことができた上に、海外では手に入りにくい日本の図書の貸し出しもあり、息子が喜んで通う姿に私は胸をなでおろしていた。特に息子が楽しんだカリキュラムは「わんぱくタイム」と名付けられた月1〜2回

のお楽しみである。普段は年齢ごとにクラス分けがなされているが、わんぱくタイムの日は、各教室がそれぞれの主題をもったテーマパークとなり、子どもたちは年齢や教室に縛られずに非日常の異年齢保育を体験できた。例えば、先生が点てたお抹茶を頂く部屋、新聞紙をビリビリと思いきり破いて新聞紙プールを作る部屋などである。毎回いろんなテーマの部屋があり、

子どもたちは縦横無尽に部屋を移動してさまざまな遊びを謳歌していた。わんぱくタイムのあった日は、決まって迎えの車の中でぐつりと眠ってしまった。四季の移ろいが美しいニューヨークの豊かな自然の中で、まさに伸び伸びと遊びを経験することができたのだった。

以上、きわめて個人的で主観的なニューヨークでの幼児教育体験談を書き綴ってきた。この経験の中で私が学んだことがあるとすれば、それは幼児であっても自らの居心地の良い場所を選ぶ権利がある、ということである。現在もおしゃべりな息子は、言葉を発する以前から、自身の理解できる言葉で話したいという欲求を募らせていたのかもしれない。そして彼が理解できる言葉で毎日楽しく安全に遊ぶ場を確保するということが、いかに大切であるかを思い知らされた。現在は日本に帰国しているが、息子の居場所を求めて逡巡した日々は、今では懐かしい思い出である。



U F Oの内側全部が鏡、つまり凹面鏡を二つ向かい合わせた仕組みで、下の凹面鏡の中心にサイコロを置くとちょうどU F Oの上あたりに像を結ぶんだそうです。この像が立体！ いろんな方向から見ても間違いなくそこにサイコロがあるんです。誰が発見したんでしょうか。結構高額でしたがこの不思議感覚がたまらず即買ってしまいました。

この若き日の感動をお客さんにも伝えたい。もっと仕入れよう。でも今でも売っているんでしょうか？ 昔買ったお店はとっくに閉店しているのに。こんな時便利なのがアマゾン！ ありました！ 多少大きさや形は変わったものの、いくつか仕入れることができました。売値で買ったので少々お高くなりますけどね。



幼児向けの積み木やパベットの十八番のヒゲダルマのオーナーもこんなジャンルは大好きで、子どものように驚いて喜びます。「えっ、なんで？」「そうか、わー面白い！」「欲しい欲しい！」

この自然な気持ちの流れって大事なことなんですよね。

面白がり上手の大人、そんなパパやママの子は自然に感性や好奇心が育って面白がるのが上手になります。目をキラキラ輝かせておもちゃの世界に浸ろうとしている子を5分もたたないうちに「もう行くよ」とせかしたり、店に入る前に「何にも買わないからね」と念を押したり、そんな悲しい親が多過ぎます。ピンアートを触ろうとせず、中空で回っているパーベル見て「磁石ね」の一言。U F Oのホログラムなんか素通りしてしまうそんなつまらない大人が増えるからおもちゃ屋はどんどんなくなっていくのですよ。科学おもちゃ、是非体験しに来て面白がって、そして買ってください。

鎌倉おもちゃ屋物語

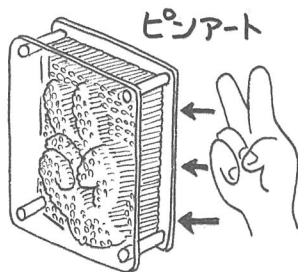
くろすかずきよ

その7

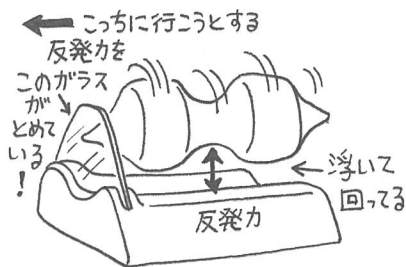
面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ!

仕入れたおもちゃだけでなく、ため込んでいたおもちゃコレクションもお店で一挙放出しよう！おもちゃの断捨離をしようと研究室や自宅の押入れを大掃除。怪獣のソフトビニール人形とかいろいろな消しゴムとか続々出てくる中、科学おもちゃというジャンルがありまして。まあ動くおもちゃの大半はなんらかの物理現象でそうなるわけですからすべて「科学おもちゃ」と言えるんですけど、どうしても手作りではできない不思議な動きや現象があるものに「科学」という言葉をつけているのでしょうか。例えば「ピンアート」「磁気浮上フローティング」「3Dミラースコープインスタントイリュージョンメーカーホログラム映像クリエイター」。名前だけでどんなものか、わかりますか？

「ピンアート」は、手のひらぐらいの大きさのプラスチック板全面にびっしりと動く釘がセットされていて、手を押し付けると手の形がそのままかたどれるというやつ。科学的というほどのものでもないですが、手のひら全面のツボを押されるみたいで気持ちいいので買ってしまったわけです。



「磁気浮上フローティング」



「磁気浮上フローティング」は、図のようなバーベルみたいなものが台の上に浮いていて端をつまんで回すと中空でいつまでも回り続けるという……磁石の反発する力を利用して、バーベルが台と絶妙な空間を保ちつつ先が端のガラス板に当たって横向きのコマのように反発力とのバランスで回っているんですけど、これ浮いている感じがするんですよ。

さて、最後の「3Dミラーなんとか」という長い名前のやつ。これが一番不思議で私大好きなんですが、UFO型の上に丸い穴が開いていてそこにサイコロが2個乗っているんですね。そのサイコロを指で触ると……これが触れないんです。指がサイコロを突き抜ける！ どう見てもそこにサイコロがあるのに。これ鏡の3Dホログラムなんですよ！

黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修会講師の仕事などで忙しい。

白大学短期大学部研究紀要』(39)、pp.115-128

天童陸子 (2016) 「育児戦略と言説の変容－育児雑誌の半世紀－」、天童陸子編『育児言説の社会学－家族・ジェンダー・再生産』、世界思想社、pp.20-42

内閣府 (2019) 「第1部 少子化対策の現状 第2章 少子化対策の取組 第1節 これまでの少子化対策」、『令和元年版 少子化社会対策白書』、内閣府、pp.53-65

<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-1.pdf> (2019.12.25入手)

<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-2.pdf> (2019.12.25入手)

<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-3.pdf> (2019.12.25入手)

中田奈月 (2004) 「『保育者』言説の変遷－厚生労働白書の分析から－」、『奈良佐保短期大学研究紀要』(11)、pp.17-29

https://narahsaho-c.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=117&file_id=22&file_no=1 (2019.10.29入手)

ベネッセコーポレーション編『ひよこクラブ』1993年11月号(第1巻第1号)～2019年7月号(第26巻第9号)

元橋利恵 (2014) 「『男女共同参画』時代の母親規範－母子健康手帳と副読本を手がかりに－」、『フォーラム現代社会学』、関西社会学会、2014年13巻、pp.32-44

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/13/0/13_KJ00009378604/_pdf/-char/ja (2019.10.29入手)

李蓮花(2017) 「児童福祉政策から人口・雇用政策へ－『厚生(労働)白書』からみた日本の保育政策－」、『静岡大学経済研究』、第21巻3号、pp.55-76

https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=8790&file_id=31&file_no=1 (2019.09.20入手)

仕事と育児を両立しようとする家庭への支援からすべての家庭への支援という変化、仕事と育児の両立が求められた後の働き方や保育サービスの多様化、待機児童が注目される時期と育児・家事・仕事のバランスをとることが求められる時期が一致すること、女性が育児の担い手であり続けることであった。

主な相違点は、少子化対策では子どもへの視点が弱いことである。子どもへの視点とは、子どもに良い保育が与えられることや子どもがきちんと育つことなど、関連記事においてママが子どもを預けて働くことに不安や抵抗感を抱く要因となっている事柄である。読者参加型の傾向が強い『ひよこクラブ』の関連記事では、読者であるママが子どもへの視点を持つことによって誌面にもこの視点が反映されていると考えられる。そして、この視点を持つことによって関連記事では不安や葛藤を抱えたママが描かれ、少子化対策のように一つの方向に短期間で進むのではなく、何度も同じような疑問や不安を問い直しながら時間をかけて変化してきたと考えられる。前述の通り関連記事は少子化対策を追いかける形で変化してきたが、このことが原因の一つとなっているのではないだろうか。

[3] 今後の課題

本研究では『ひよこクラブ』の関連記事と少子化対策の取り組みとの比較を行い、少子化対策には子どもへの視点が見られないことを示した。この結果から、子どもや保育への視点を持つ行政文書であると考えられる『厚生(労働)白書』との比較検討を行うことを今後の課題とする。また、本研究によって、子育てを担うのは母親であり、父親の役割は子どもの預け先や協力者にとどまったことが明らかになった。育児に協力的な男性を理想とする「イクメン」ブームを踏まえ、育児における父親の役割を検討することも今後の課題としたい。

文献一覧

- 厚生労働省 (2019) 『令和元年 (2019) 人口動態統計の年間推計』、厚生労働省、
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei19/dl/2019suikei.pdf>
 (2019.12.25入手)
- 新村出編 (2018) 『広辞苑 第七版』、岩波書店
- 全国出版協会出版科学研究所編 『出版指標 年報』1994年版～2019年版
- 高橋均 (2016) 「変容する育児雑誌の現在 - 『ジェンダー化』・『教育化』の視点から -」、
 天童睦子編 『育児言説の社会学 - 家族・ジェンダー・再生産』、世界思想社、pp.
 43-77
- 天童睦子 (2002) 「育児雑誌の変遷と母の形成 - 育児知識との関連において -」、『目

の担い手であり続け、パパは子どもの預け先や育児の協力者にとどまったのである。なお、これらは時期によって多少の変化が見られるため、詳細は後述する。

全体を通して現れた3つの変化を示す。第一に、ママが抱える不安やその不安への対応が変化したことである。ママは子どもを預けること自体が子どもに悪影響を与えるという不安を抱えていたが、預けた上で子どもに悪い影響を与えないために何をすべきか、子どもが預け先に馴染めるかなど、預けることを前提とした不安へと変化した。これらの不安に対して、預けることは子どもに良い影響も与えられるという内容のみから、一緒に過ごす時間の長さは重要ではないことを示し不安自体を解消するように変化した。

第二に、子どもを預けることによるメリットが語られることが増加し、内容にも変化が見られた。ママにとっては精神的に余裕ができることやそれによって育児に前向きになれることであり、就労の有無に関わらず預けることが推奨されるようになった。子どもにとってはママに余裕ができ、ママと子どもの関係が良好になることであったが、子ども自身へのメリットが多く示されるように変化した。

最後に、働くママや子育てを行うママについての変化が見られた。働くママが増加したことにより、ママが働くことが特別なことではなくなった。保育園や保育サービスを利用することで育児自体の負担は軽減されるようになったが、その分仕事をしなくてはならないため、ママの負担は重いままであった。働くママが増えたことによる変化に加え、ママ自身の生活が大事にされるようになるという変化が見られた。すべての時期を通してママは子ども第一であることが求められてはいるものの、ママの負担軽減を目的とした保育サービスの利用が推奨されるようになった。また、ママが希望する生活に合わせた仕事や働き方を選ぶようになることや、ママ自身が寂しいという理由で子どもを預けたくない様子も見られるようになった。子どもだけでなくママの生活や気持ちを大事にするようになったことがわかる。

[2] 少子化対策との関係

ここまで『ひよこクラブ』の関連記事の内容の変化について考察してきた。本項では、『令和元年版 少子化社会対策白書』をもとに、1990年以降の日本政府による少子化対策の変化と、『ひよこクラブ』の関連記事の変化との関係（比較）を考える。関連記事の中で重要な意味を持つ女性の就労や待機児童の課題が少子化対策の要となっていることや、1990年以降の主要な子育て支援の政策や法律が少子化対策の一環とされていることがその理由である（内閣府 2019, p.65）。

関連記事と少子化対策の内容の変遷は、関連記事が少子化対策を追いかける形で時間的なずれは存在するものの大まかな流れは同じであった。両者に共通する点は、

とがわかる。保育園に入園できるかという不安に加え、保育の質が低く子どもに危険が及ぶ保育園への不安が見られた。以前より具体的な情報や対処法が紹介されたことから、危険な保育園の存在がママにとって身近なものとなり危機感を持つようになったと考えられる。なお、第4期に認可施設に預けることを強く望むようになった理由の一つとして保育の質の低下や子どもに危険が及ぶ保育園の存在が考えられる。しかし、保育園や保育士全体への評価が変化しなかったことから、子どもに危険が及ぶ保育園や保育者は一部であり、保育園や保育士への期待は高いままであったと考えられる。

第4期の特徴として、ママ自身に焦点が当てられたことも挙げられる。ママ自身の希望をもとに働き方や仕事を選択することが示されると同時に、ママ自身に預けたくない気持ちがあることが浮き彫りになった。これまで、働くことや子どもを預けることについて、子どものためになることを選択することが強調されてきたが、ママの希望によって選択することが肯定されたと言える。一方で、依然として子どもを第一に考えることや子どものために行動するママの姿も求められた。

4. 全体的な考察と課題

[1] 4期にわたる全体的な考察

時期区分ごとの考察をもとに全体的な考察を行った(図2)。第1期から第4期まで共通して見られた内容は、ママが子どもを預けることへの不安やためらいを抱えていること、その一方で預けることは両者ともに良い影響があるとされたことである。また、ママは子どものことを第一に考えて行動する存在であり、家事と育児

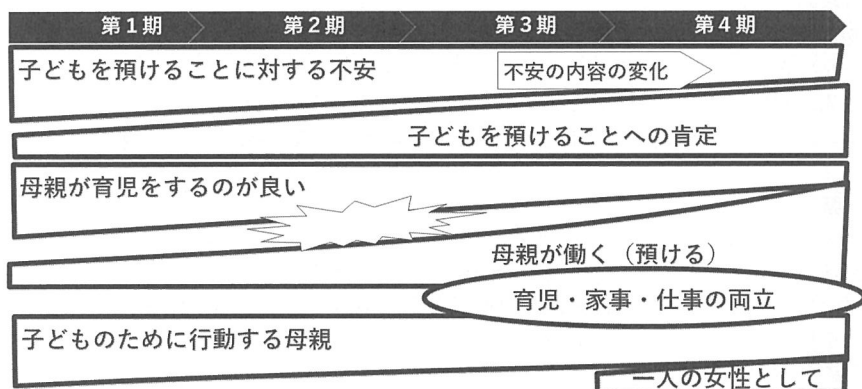


図2 4期にわたる共通点と変化

預けることへの罪悪感に対して、専門家は子どもに良い影響があることを主張するとともに、ママが働くことが家族のためになるとして推奨した。小さい子どもを保育園に預けることがかわいそうという認識が変わってきたことも紹介された。なお、子どもを預ける場合は子どもと向き合う時間やスキンシップが大切とされた。預けるときに子どもが泣くことでママが罪悪感や切なさを感じてしまうと、子どもがさらに離れ難くなってしまうため、預けられる子どもはかわいそうではないとママが考えることや笑顔で預けることが勧められた。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

仕事以外の理由もあるが、ママが働く家庭や共働き家庭が主であった。

④働くママ

ママが働くことは経済的な面から子どもの将来のためになり、子どもを預けられないことが理由で仕事を辞めるのはもったいないとされた。しかし、働くママは子どもがいる人生を選んだため仕事だけでなく育児や家事も大切にしなければならないとされ、働くママが子どもと向き合う時間を確保するために工夫する様子が示された。働き方はフルタイムや時短勤務、起業など様々であり、ママの希望や価値観によって適した働き方や、働き方に合った預け先を選ぶことも求められた。保育園に入園させるために育休期間を短縮するという手段も紹介された。ママは保活や仕事復帰の準備で忙しいが、育休期間を楽しむことも忘れないようにとした。

⑤保活、待機児童

保育園に入園できない不安があり、子どもが1歳になるまで待つと入園が難しいことや保活の開始時期が年々早まっていることが示された。保活の具体的なテクニックや戦略などが紹介されるとともに、希望の園に落ちた場合の対応を考えることも求められた。

⑥育児・家事・仕事をこなすママ

ママが育児・家事・仕事を担うことが前提であり、仕事復帰をした後に職場や預け先、家庭でトラブルが起りやすいことが示された。これらをこなすに当たりバランスをとることやパパと分担をすること、妥協をする必要があるとされた。

考察

第4期は、保活や待機児童問題への関心が高まった時期である。2016年に「保育園落ちた日本死ね」という言葉が話題となったことがこの要因と考えられる。この「保育園落ちた」という言葉は、認可保育園の不承諾通知が届き保活に失敗したことを指す。保活への不安や開始時期が年々早まっていることだけでなく、落ちた場合の具体的な行動を紹介する記事が増加したことからもこの言葉の影響が大きいこ

ママ自身のために預けることにはためらいや罪悪感があるが子どものためであれば肯定されるなど、その理由によって評価が変わったと言える。

ママが働くことが当然となったことによって、育児・家事・仕事すべてをこなすことが求められるようになった。ママが工夫して作った時間は子どものために使うとされ、育児が疎かになるのであれば働き方を見直す必要があるとされた。したがって、ママが働くことは認められたが、あくまでも子どものために努力するママが求められていると考えられる。

保育園は子どもを預かるだけの場所ではなく、質の高い保育や地域の子育て支援の場であることが求められ、保育士をはじめとした保育者はプロフェッショナルとして評価されるようになり始めた。このことから、子育てはママとしての経験だけでなく専門性や正しい知識を持つ人が行うことが求められるようになったと考えられる。また、第2期と比較して保活の記事が増加し、より詳細が示されるようになり、保活への注目度が高くなったことがわかる。

[4] 第4期：「保育園落ちた」(2016～2019年)

①預け先

仕事などの理由で長期的に子どもを預ける場合は、認可保育園、認可外保育園、それ以外の保育サービスの順に利用を希望するとされた。短時間預けるときには、子どもが元気な場合は保育サービスを利用することが勧められた。子どもが病気の場合にはママやパパが子どもの世話をすることが求められ、それができない場合にじいじ・ばあばや病児・病後児保育に預けるとされた。

保育園は、子どもが同年代の他の子どもと関わり成長する場や、ママ以外の複数の人から愛情を受ける場として評価され、保育者は子どもの安全を確保するとともに細やかな世話の中で自立をサポートする役割を担うとされた。しかし、保育園での生活や保育士の関わり方に不安がある園も存在するため、保育園を選ぶことが求められた。園選びに失敗した場合には転園や退園を検討することも紹介された。

②預けること

働いていないママも子どもを預けてリフレッシュすることが勧められ、仕事以外の理由で子どもを預けることが肯定された。預けることは子どもとママの両方に良い影響があるとされた。また、預けることは保活を有利に進める手段にもなった。子どもを預けることのデメリットとして、罪悪感や申し訳なさだけでなく、子どもの成長の瞬間を見られないことや子どもと離れることへの寂しさが挙げられた。子どもの成長や発達に悪影響があることへの不安や、保育の質の低下によって子どもに危険が及ぶことへの懸念も示された。

育てた方が良いという考えがあり、ママも罪悪感や迷いを抱えていた。さらに、ママが子どもを手元で育てたいと考え、成長を見逃すことに不安を感じていることが語られた。預けることを前提とした上での不安も現れた。ここで、先輩読者や専門家の意見を用いて不安の解消に努める様子が見られた。預けることで子どもに良い影響があると示すとともに、不安を感じる必要はないとする意見や一定の条件を満たせば問題はないとする意見も現れた。また、ママと子どもが一緒に過ごす時間については、量よりも密度が重要であるとされた。そして、ママが預け先との信頼関係を築くなど、子どものためにママが認識や行動を変えることも求められた。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

他の理由の場合もあるが、ママやパパが働いていることが主な理由であった。1990年代とは異なり、じいじ・ばあばに預けられないことは言及されなかった。

④働くママ

ママは仕事だけでなく育児も大切にしなければならず、育児への影響が大きい場合には働き方の見直しが推奨された。子どもとの時間を作るために工夫し、子どものための愛情表現も求められた。ママが忙しくなることへの不安や働くことへの葛藤も見られたが、仕事でのストレスを家庭で、家庭でのストレスを仕事で発散できるというメリットも示された。働くママから時短のテクニックや子どもとの接し方を学ぶという記事も現れた。2012年には、経済的な理由で働くことが多いとされた。

⑤保活、待機児童

保育園に入園できず待機児童になってしまうという不安が語られ、保活で失敗しないためのテクニックやポイント、保活のスケジュールが紹介された。その一方で保育園を選ぶ必要があるとされた。また、子どもを預けられない求職中や在宅ワークのママの大変さが語られた。

⑥育児・家事・仕事をこなすママ

ママの復職後に職場、預け先、家庭でトラブルが起きるため、その対策を紹介する記事が現れた。仕事と育児を両立できるかというママの不安が多く紹介され、復職後にはママに負担が集中しがちであるとされた。完璧を目指すのではなく自分に合った妥協点を見つけることが不安の解消や両立にとって重要とされた。

考察

第3期は子どもを預けることやママが働くことが当然となった時期である。しかし、預けることへの不安やためらいがなくなったわけではなく、預けることで子どもに悪影響がないことや子どものためになることが強調された。つまり、子どもを預ける際に保育サービスを利用することへの抵抗感は薄れたものの存在しており、

2000年代初頭には、働きたくても保育園に入れないという悩みが語られていた。そして2009年には、早めに準備をしておかないと保育園に入れなくなるという注意喚起がされ、保育園の確保や入園へのアドバイスが掲載された。

考察

第2期は働くママが増え、子どもを預けざるを得なくなった時期と言える。第2期は他の時期と比べて関連記事が少なく、保育園に関する内容は極端に少なかった。その一方で働くママの7割以上が子どもを保育園に預けているとされたことから、働くママが保育園に子どもを預けることが一般的になっており、利用の是非を考える必要が無かったため保育園についての記事が少なかったと考えられる。

保育園に子どもを預けることが増えた第2期でも、預けることでママと子どもが離れる時間が増加することへの不安があった。このことから、ママと子どもが一緒にいることが良いとする育児観が第2期にも存在したと言える。第2期では時間の濃さや密度という言葉を使い、ママと子どもが一緒にいる時間の長さが直接的に子どもに影響を与えるわけではないことを主張した。働くママが増える中で、時間の濃さや密度という言葉がママたちの免罪符になっていたと考えられる。また、働くママは短い時間で育児や家事を行うテクニックを持っているとされ始めた。

なお、子どもを預けることが一般的になったのはあくまでも働くためであり、リフレッシュ目的やママの用事で子どもを預けることは少なかった。

[3] 第3期：リフレッシュ目的への注目／保活の始まり (2010～2015年)

①預け先

子どもを預ける理由として、病気や仕事、保育園の送迎及びその前後の時間に子どもを預けるだけでなく、ママのリフレッシュを目的とすることも紹介された。リフレッシュ目的で預けることをわがままやぜいたくであると考える人が多いが、保育士や専門家がそれを否定することで利用を促した。以前と比較して少なくなっているが、保育園に預ける良い影響だけではなく不安も存在した。保育園での生活を実際に見ることで安心できるとされ、お試し保育や一時保育で子どもを慣らすことが勧められた。保育士の育児テクニックや子どもへの関わり方を保育士から学ぼうとする記事も現れた。

②預けること

子どもを預ける時間があることはママにも子どもにもメリットがあることに加え、預け先はいざという時の身内以外の頼れる場所になり心強いとされた。反対に、子どもの成長に悪影響がある可能性や預けることがかわいそう、3歳までは親元で

ることが示され、短時間の場合にはじいじ・ばあばやパパといった身内に預けることが優先された。身内以外の保育サービスの利用が推奨されたが、利用への不安や抵抗感が大きかった。2003年にはママのリフレッシュ目的で子どもを預けることも取り上げられたが、実際に利用したという事例は少なかった。

②預けること

ノイローゼになりやすいなどの理由から専業主婦であっても子どもを預けることが大切であるとされた。そのため、短い時間だけ預けることが推奨され、実際に預けた事例も紹介された。また、預けることは子どもにとっても良い経験、良い刺激になるとされた。しかし、預けることへの不安や抵抗感、子どもの成長を見逃すかもしれないという心配、子どもの心の発達に悪影響があるかもしれないという不安も見られた。これに対し、時間の濃さや密度といった言葉を使うことで子どもと過ごす時間が短いことによる不安を解消しようとする様子がうかがえた。離れる時間の大切さには触れながらも「3才までは母子密着が基本（表記：掲載の通り）」（2000.3, p.155）と専門家が語ることもあった。さらに、一時的に子どもを預けることをばあばから責められた経験も紹介された。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

関係する内容は掲載されなかった。

④働くママ

育児から離れる時間が気分転換になることやそれによって育児に前向きになれることをママ自身が語り、専門家も子どもが幼くてもママが社会に出て働くことを推奨した。ママが働くことで子どもの世界が広がるなど、子どもにとっても良い影響があるとされた。その一方で、ママたちは子どもに寂しい思いをさせる不安や子どもを預けて働くことへの迷いを抱えていた。そのため、子どものために在宅での内職を選ぶ人もいれば、子どものためにも保育園に預けたいと考えて働く人もいるなど、働く理由やその選択は様々であった。また、働くママは家事や育児の裏技を持ち、時間を上手に使っているとされ、そのテクニックを学ぶ記事が現れた。

⑤保活、待機児童

「保活」とは、子どもを保育園に入園させるために保護者が行う活動を指した造語である。就活¹や婚活²とともに保活という言葉が使われるようになったことで、保護者が子どもの保育園入園のために活動していることが社会的に認知されるようになった。『ひよこクラブ』では2000年代には保活という言葉は使われなかったが、

1 就職活動を省略した言葉（新村編 2018, p.1372）。

2 結婚相手を探す活動であり、就活になぞらえた造語（新村編 2018, p.1117）。

ることが子どもに悪影響を与えるという考えも存在した。実際に子どもを保育園に預けて働くことがかわいそうと言われた経験や、非難された経験が語られた。そのような言葉を気にしつつも実際に子どもを預けることで考えが変わったママや気にならなくなったママが紹介された。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

他の理由がある可能性も示されているが、ママが働く家庭が中心とされている。共働きかつ、じいじ・ばあばが子どもを預かることができない家庭の子どもは「事情のある子ども」（ベネッセコーポレーション 1996.10, p.185. 以下、『ひよこクラブ』からの引用は月号とページのみ表記する）とされた。

④働くママ

読者や専門家は、働くことがママの気分転換になり、それによって子どもにもメリットがあるとした。その一方で、ママが働くことは子どもが幼い頃から保育園に入園することに直結し、子どもの成長や心への悪影響を懸念する声やかわいそうという言葉が目立ち、ママが罪悪感を抱えていることも示された。

考察

第1期は、ママへの期待が大きい時期である。子どもを預けることはママと子どもが離れる時間が増えることになるが、それに対して愛情不足や子どもの成長への不安が語られた。さらに保育園以外の保育サービスの中で最も注目度が高いと言える家庭福祉員は、子どもを産んだ女性に限定された職業ではないにも関わらず保育ママと呼ばれ、3人の子どもを産み育てた女性の家庭福祉員が紹介された。また、子どもを預ける際には保育園よりもじいじ・ばあばを先に頼るとされたこともこの時期の特徴である。したがって、子どもを育てた経験がある「ママ」に安心して子どもを預けることができ、ママと離れる時間があるだけで子どもの成長や子どもが受ける愛情に不安を感じるほど、ママこそが子どもを育てるのにふさわしい存在とされていたと考えられる。しかし、当時のママたちはこの考えに完全に同調していたとは言い難い。当時のママはじいじ・ばあば、専門家や同世代のママ、時には自分自身の経験という異なる考えの中で苦悩していたことがうかがえる。

また、第1期はママの働き方や仕事限定されていたことから、働くママは増加しているものの働くことが一般的とは言えない時期であったと考えられる。

[2] 第2期：身内に預けて働く（2000～2009年）

①預け先

ママが働くなど長期的に子どもを預ける場合は7割以上の人が保育園を利用す

表1 時期区分と記事内容の項目による分類

項目	第1期(1993～1999年)	第2期(2000～2009年)	第3期(2010～2015年)	第4期(2016～2019年)
①預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先 (エ) 保育園選び (オ) 保育者	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先 (エ) 保育園選び (オ) 保育者 (カ) 保育園の種類
②預けること	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き
③保育園(=毎日)に預ける親、家庭	働くママ 仕事以外の理由 「事情がある」		働くママ 仕事以外の理由	働くママ(パパ) 仕事以外の理由 「保育の必要性」認定
④働くママ	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク
⑤保活、待機児童		(保活や待機児童という言葉はない)	(ア) 保活への不安 (イ) 具体的な活動 (ウ) 働けないママ	(ア) 保活への不安 (イ) 具体的な活動 (ウ) 働けないママ (エ) 保育園に落ちた場合 (オ) 情報の混乱
⑥育児・家事・仕事をこなすママ			不安、大変さ 完璧でなくてよい	トラブル対策 バランスをとる

どもを預けることでママに精神的なメリットがあるとされる一方で、子どもと過ごす時間が短くなる不安や預けることへの罪悪感を抱えていることが語られた。実際に預けてみることで不安がなくなったという意見や、預けずに自分で育てたいという意見を持つママがいることも示された。ママに精神的な余裕があることで子どもがより良い環境で生活できることや、預け先で成長が促されるなど子どもにとってもメリットがあるとされた。しかし、ママと子どもが一緒にいることが良い、預け

以上の条件をもとに抽出したところ関連記事は70項目となり、各年に現れた関連記事の本数を図1に示す。なお、記事には編集者が書いた文章、専門家が語った内容、読者投稿や読者が語った内容が存在しすべての文章を分析対象とした。専門家には学者や保育士をはじめとして保育情報アドバイザーなども含まれる。

3. 結果と考察

関連記事の分析を行った結果、記事の内容から4つの時期区分が現れた。それぞれ、第1期：子どもを預けて働くことが「かわいそう」（1993～1999年）、第2期：身内に預けて働く（2000～2009年）、第3期：リフレッシュ目的への注目／保活の始まり（2010～2015年）、第4期：「保育園落ちた」（2016～2019年）の4期である。

各時期に現れた記事の内容は次のように分類された（表1）。第1期は「①預け先」「②預けること」「③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭」「④働くママ」、第2期はこれに「⑤保活、待機児童」を追加し、第3期と第4期にはさらに「⑥育児・家事・仕事をこなすママ」が追加された。なお、この分類のうち①預け先 ②預けること ④働くママ ⑤保活、待機児童には下位項目が現れた。それぞれ、「①預け先」では（ア）預ける順番（イ）保育園イメージ（ウ）保育園以外の預け先（エ）保育園選び（オ）保育者（カ）保育園の種類、「②預けること」では（ア）親にとって（イ）子どもにとって（ウ）預ける時の子どもの泣き（エ）周囲の言葉、「④働くママ」では（ア）親自身（イ）子どもへの影響（ウ）仕事（エ）子どもを預けて働き始める時期（オ）働くママのテク、「⑤保活、待機児童」では（ア）保活への不安（イ）具体的な活動（ウ）働けないママ（エ）保育園に落ちた場合（オ）情報の混乱である。

本章では、以上の時期区分と記事の内容をもとに時期区分ごとの分析を行う。

『ひよこクラブ』では母親、父親、祖父母がそれぞれママ、パパ、じいじ・ばあばと呼称されることに従い、本章ではこの名称を用いる。

[1] 第1期：子どもを預けて働くことが「かわいそう」（1993～1999年）

①預け先

保育園の利用はママの精神的負担の軽減や子どもが成長することに役立つという点でママにも子どもにも良いとする一方で、保育園への不信感も語られ、じいじ・ばあばを先に頼ることも示された。保育園以外の預け先として幾つかのサービスが紹介され、専門家が利用を推奨した。その中でも家庭福祉員は子守の達人とされた。

②預けること

一人の時間ができることで心の余裕ができること、前向きになれることなど、子

してきた（全国出版協会出版科学研究所編 1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019）。なお「読者参加型」育児雑誌とは、読者投稿や読者間の情報共有によって読者の共感を誘う育児雑誌であり、1990年代に一世を風靡して以来、主流となった。また、高橋（2016）が父親の育児参加と子どもの能力開発志向を軸に1990年代以降の母親向け育児雑誌を配置したところ、『ひよこクラブ』は中間的な位置であった。したがって、『ひよこクラブ』は子育て家庭の育児観やその変容を把握しやすい育児雑誌であり、その中でも読者間の情報共有や共感を重視しており、父親の育児参加や子どもの能力開発志向において極端な偏りが無いと言える。そのため『ひよこクラブ』は一般的な子育て家庭が持つ価値観を反映してきたと考えられ、本研究の研究対象として適切であると言える。

2. 研究の方法

『ひよこクラブ』のうち、欠号である1993年12月号から1994年4月号を除く創刊号の1993年11月号から2019年7月号、計304冊を分析対象とした。各号の目次を閲覧し、子どもを預けることに関係が深いと考えられる記事を「関連記事」として抽出した。関係深いとする条件は「預ける」「働くママ」及びこれに準ずる文言が記事の題名に含まれること、または題名の中で保育園をはじめとした育児施設が子どもの預け先として扱われていることである。なお、「働くママ」をキーワードとした理由は、子どもの預け先の普及の背景に女性の就労や社会進出の増加とそれらを促すという目的があること、『ひよこクラブ』においても子どもを預けることと母親が働くことが同一の文脈で語られてきたことである。

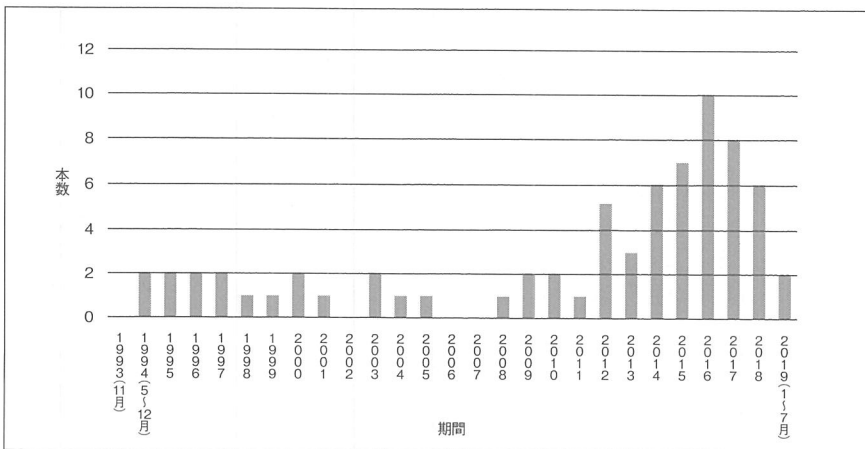


図1 関連記事の本数の推移

育児雑誌『ひよこクラブ』における 子どもを預けることに関する言説の変化

栗原 結海*

Changes in discourse on leaving children with day care centers and others
in childcare magazine 'Hiyoko Club'

Yuumi KURIHARA

1. 問題と目的

日本が抱える少子化や児童虐待という社会問題の原因の一つとして、母親の育児負担の大きさが挙げられる。両親が協力して育児を行うことを求める傾向は強くなっているものの、多くは母親が一人で育児を行っているのが現状である。子育ては母親が家庭で行うべきとする育児観が多くの人の考えに根付いており、このような育児環境が改善されず存在し続けているのではないだろうか。

育児に関わるメディアを用いて育児観を明らかにした研究として中田 (2004)、元橋 (2014) が挙げられる。これらは『厚生 (労働) 白書』や母子健康手帳及び副読本を分析対象としているため、一般的な子育て家庭が持つ育児観よりも行政の理想を示すと言える。子育て家庭にとって身近なメディアである育児雑誌の研究を行った天童 (2016) では、育児雑誌に現れる育児言説の変容を明らかにしており、特定の育児観に焦点を当てているわけではない。そこで本研究では、子育ては母親が行うべきであるとする特定の育児観が、一般的な子育て家庭においてどのように捉えられているのかを明らかにすることを目的とする。なお、子どもを預けるという具体的事象に焦点を絞り、研究を行う。

本研究では、育児雑誌『ひよこクラブ』を研究対象とする。李 (2017) が指摘したように、行政文書は国や行政の意向が反映されており、一般的な子育て家庭の価値観が読み取れるとは言い難い (李 2017, p.56)。行政文書以外の育児に関わるメディアには育児雑誌と育児書がある。天童 (2002) によると育児雑誌は育児書に比べて読者のニーズに敏感であり、読者である子育て家庭の育児に関わる価値観の変化を把握しやすいという特徴がある (天童 2002, p.116)。そのため、育児雑誌は行政文書や育児書に比べて子育て家庭の価値観やその変容を把握しやすいと言える。育児雑誌の中での『ひよこクラブ』の立場を明らかにする。『ひよこクラブ』は「読者参加型」育児雑誌の代表格であり、1993年の創刊から継続的に読者を獲得

* 2020年お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科学卒業。現在、一般企業勤務。

◇ナーサリーこぼれ話◇

「食べるということ」

「今日もほとんど食べてない。調理室を担当するHさんの、数日来の嘆きだ。1、2歳児にじくみの子どもたちのお昼どき、お代わりはおろか、白飯がほとんど食べ進まずに茶碗が下げられてくるが続いていた。9月後半になってなお残暑が厳しいことも影響しているのかもしれないが、それにしても、食べが悪い。

食べるということは、栄養素を体内に送り込むことだけを意味するのではない。気力が充実してたっぷり遊んでいれば、おなかもすいて食欲もわく。食べることで、次の時も楽しみに生きようとする活力を得る。生き生きと生きようとする前向きさの、何よりの表れでもあるのだ。Hさんは前年度まで担任として保育を担い、今は調理室を担当している。ほぼついだま減らずに戻ってくる白飯に、子どもたちの生活が生き生きしたものになりきっていないのではないかと、Hさんの心配は募る。

折しもその週の食材の配達日に、新米が届く。食する、ということ、を、単に提供する人が提供し食べる人が食べるというルーティンにするのではなく、そのプロセスを共に味わい楽しむような活動にしよう。Hさんは、子どもたちが食事をとる保育室に炊飯器を持って行き、炊きたての新米を、子どもたちの前でよそった。

子どもたちの食べの良さといったらなかった。米そのものと共に、炊きたてホカホカのおいしい匂いの中に漂う愛も、子どもたちはその身に取り入れたのだと思う。Hさんはすぐに、「ちゅーぼーだより」を作った。こと保育において、食べることを侮ってはいけぬ。あらためてそう思う。(主任保育士K)

ちゅーぼー(園報だより) 付録

<ナーサリーのお味噌汁に入る具を紹介します>

たまねぎ・にんじん・だいこん・じゃがいも・さつまいも・キャベツ・ほうれん草・えのきだけ・かぶ・ごぼう・かぼちゃ・さといも・とうふ・あぶらあげ・わかめ

季節ごとの野菜を選んで、毎日3、4品ずつ具材にしています。
さいの目に切ってみたり、いちよう切りや細切りしてみたり一切り方によっても、食の進みに差が出るようです。



おやつメニューにも季節の野菜や果物が出ます。
「おやつだより」をご覧になって、必ずはお家で食べてみてくださいね。



新米はおいしい!

10月2日、生協から新米がときました。
炊きたて新米→炊飯器をのぞき込んで、「いいにおい!」を確かめたりして、おいしくいただきました。



お便り

POST

◇私の「カルチャー・いんふお」◇

映画『最初に父が殺された』（アンジェリーナ・ジョリー監督 Netflix 2017年）を見ました。1975年、主人公は生まれ育ったカンボジアの首都プノンペンを家族と共に追われ、地方に向かいます。カンボジア人市民を追い立てたのはクメール・ルージュと呼ばれる当時の革新的共産革命軍でした。ポル・ポトをリーダーとする赤い組織オンスカは、新しい国を建設すると称し、邪魔になるであろう知識人、旧政府軍の軍人たちを次々と粛清していきます。物語は故郷を後にして生き残っていく過程を当時5歳の女の子ルオンの視点で描きます。8人だった家族も、年上の兄弟は離れてキャンプで共同生活を送り、父母と年下の子どもはそれまでの暮らしとはかけ離れて貧しい小屋で飢えに耐えながら暮らし始めます。革命政府は国民がギリギリで生きていける食料しか与えません。そして一家は元軍人の父親を最初に失います。革命軍の兵士に追い立てられ、帰って来ない父親が死んだであらうことを感じます。母親は子どもたちに命を承えてほしいとバラバラに逃げるよう懇願します。ルオンはのちに、残った母親も幼い妹と共に姿を消した、つまり命を失ったことを知ります。孤児のふりをし、子どもたちばかりを集めた労働キャンプで幼い兵士としての訓練をこなしながら生き残ったルオンは1980年にアメリカにたどり着きます。一緒に移住できた兄はカンボジアに残った兄弟姉妹を養うために働きます。ソビエト、東欧諸国で共産主義政府のもとたくさんの人々が粛清され、不自由な生活を送りましたが、日本と同じアジアにもこのような歴史がありました。原作『最初に父が殺された あるカンボジア人少女の記憶』（ルオン・ウン著 無名舎 2000年）も出版されています。（AK）

◇研究論文を募集します◇

ピアレビュー(査読)の上、掲載します。

- 【テーマ】 子ども、保育、幼児教育に関するもの。
- 【文字数等】 400字詰め原稿用紙 35枚程度（写真・図表、文献、注を含む）。本文はワードで作成。
- 【締め切り】 随時募集します。投稿予定の方は本誌編集委員会まで。

Mail: yuji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

お茶の水女子大学・公開セッション 「子育て支援フィールドワーク」開催

お茶の水女子大学で、保育現職者・社会人対象の講座「保育・子育て支援ラーニングプログラム」が開設されています。その一環で、2020年度後期に「子育て支援フィールドワーク」という公開セッションを開く予定です（担当：宮里暁美、浜口順子）。地域の子育て支援施設を視察する予定ですが、新型コロナウイルスの感染状況により、具体的な内容は未定で、大幅な変更もあり得ます。リモート形式となる可能性もありますが、簡単なお申し込みでご参加いただけますので、10月以降、お茶大のホームページをご確認ください。

下記のメールでのお問い合わせも受け付けます。資料代（参加費）として、3000円前後を予定しております。

【お問い合わせ先】 お茶大 ECCELL 社会人プログラム 事務局

【Eメール】 nyuoyoji-info@cc.ocha.ac.jp



Brush Up Program for professional

編集後記

新型コロナウイルスの感染が拡大し、変わることと変わらないことの間で世界中が揺れているように思える日々が続いています。オリンピックの延期に始まり、学校が2か月以上にわたって休校になるという事態に揺れた春。感染防止の努力を重ね、夏、そして秋へと暦は進んでいます。そのような中で発刊する【幼児の教育】秋号です。

「暮らし」という観点から、今回は「食」に焦点を当てて座談会をしました。「食」こそが、どのように世界が揺れようと変わらずにあるものではないでしょうか。通常よりも自宅で過ごすことが多かった今年の春、夏には、食事作りを楽しむ動きが日本中に広がりました。また、良質の「食」を宅配する動き

も生まれました。「食」には、困難の中でも灯される希望の光があるように感じます。

毎年5月に開催されていた日本保育学会も中止になりました。研究者と実践者が集い、幼児教育の今について学びあい語りあう機会を失ったことの失望感は大きなものでした。ぽっかりと穴が空いてしまったような気持ちもありましたが、それぞれの場で研究を深める動きも広がっているように思います。

人が集うことが困難である状況はまだしばらく続くと思われませんが、誌面やWEB上での語り合いや学び合いの可能性はさらに大きく広がっていくと思います。本誌の役割を自覚し、しっかりと発信していきたいと思います。(MA)

次号予告 幼児の教育冬号 2021年1月刊行予定

新章スタートの特集をはじめ、多彩な顔ぶれでお届けします。

- ◇ 保育の「根本考察」にチャレンジ! 14
「暮らし」の視点で保育を見直す - これからの生活を考える (リモート形式座談会)
ベルガー有希子氏 (ドイツ・ミュンヘン市保育士)、井内聖氏 (北海道・はやきた子ども園) ほか
- ◇ 子どもには「密」が必要! 仙田 満氏 (公益社団法人こども環境学会代表理事)
- ◇ 「異文化」としての花屋さん 松山 誠氏 (園芸文化史研究。「園芸探偵」)

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 秋号 第119巻 第4号

令和2年10月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/お茶の水女子大学
【幼児の教育】編集委員会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
浜口順子研究室内
youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所/株式会社フレーベル館
電話: 03-5395-6604 (編集)
振替/00190-2-19640
印刷所/図書印刷株式会社
定価/本体880円+税
◎お茶の水女子大学【幼児の教育】編集委員会
2020 Printed in Japan 無断転載禁止
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員/上坂元絵里
菊地知子
松島のり子
宮里晓美
お茶大3園合同研究会
(附属幼稚園、
いずみナーサリー、
文京区立お茶大こども園)
編集協力/フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613 (営業) ●

無藤 隆、大豆生田啓友監修

子どもの姿ベースの指導計画が スラスラ書ける！

子どもの姿ベースの 新しい指導計画の考え方 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著

高嶋景子、三谷大紀、北野幸子、齊藤多江子、
松山洋平、和田美香／執筆指導計画の考え方をマンガやイラストでわかりやすく
解説した理論編96ページ 26×21cm 定価 本体 2,408円＋税
109-74 ISBN978-4-577-81468-0

0・1・2歳児 子どもの姿ベースの指導計画 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著

高嶋景子、齊藤多江子、和田美香／執筆

子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、0・1・2歳児
の年間計画・月案・資料を掲載192ページ 26×21cm 定価 本体 2,900円＋税
109-75 ISBN978-4-577-81469-7

3・4・5歳児 子どもの姿ベースの指導計画 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著

三谷大紀、北野幸子、松山洋平／執筆

子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、3・4・5歳児
の年間計画・月案・資料を掲載192ページ 26×21cm 定価 本体 2,900円＋税
109-76 ISBN978-4-577-81470-3

遊びが育つ 保育

～ごっこ遊びを通して考える

共編著／河邊貴子（聖心女子大学）
田代幸代（共立女子大学）

子どもたちにとって身近な遊びである「ごっこ遊び」に焦点を当て、園での遊びを引き出し、盛り上げる環境の在り方、保育者の援助など優れた実践事例から具体的な方法を紹介。

3歳児から5歳児の子どもの発達と遊びの発達を写真やイラスト、図表などを豊富に使って解説します。

遊びが育つ保育

～ごっこ遊びを通して考える

河邊貴子（聖心女子大学）
田代幸代（共立女子大学）

遊びを中心とした保育を豊かに展開するために

乳幼児期の子どもにとって重要な「遊び」、それをどう育てるか「ごっこ遊び」に焦点を当て、具体的な事例からポイントを解説！

定価本体 1,800 円 + 税 全 80 ページ
26×18cm 109-88 ISBN978-4-577-81488-8



CONTENTS (一部抜粋)

- 1章 ・・・ なぜ、ごっこ遊びは大切か
 - 遊びの大切さ
 - これからの保育と遊び
 - 遊びの総合性と「10の姿」
 - ごっこ遊びに焦点化
 - ごっこ遊びの意義
- 2章 ・・・ ごっこ遊びの発達
 - 3歳児～5歳児の具体的な事例
- 3章 ・・・ ごっこ遊びを支えるポイント
- 付録 ・・・ ごっこ遊び Q&A

幼児の教育 第一一九巻 第四号 令和二年十月一日発行

定価 本体八〇〇円十税

キンダーブックの **フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所 または本社営業推進チーム(03)5395-6608にお問い合わせください。